
俺が異世界で旅をする

虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が異世界で旅をする

【Nコード】

N6838U

【作者名】

虎

【あらすじ】

ある日自分の家で謎の玉を拾う。
それがすべてのきっかけだった。
幼馴染は攫われ、俺は異世界へ助けに行く。
異世界へ転生じゃなくて普通に行くなんて・・・
俺はどこまでやってけるんだ？

俺の人生に一番影響を与えた日（前書き）

どうも、ノリと勢いで書き始めてきがついたら結構頑張っていた。

俺の人生に一番影響を与えた日

どうも。俺の名前は井沢大樹^{いざわだいこき}。

高校生一年生。趣味はブロック崩し。特技はまだない。好きな色は銀。

初対面の人間にこんなことを言ったらどう思われるだろう？

いや気にしないさ。そんなこと気にするなんてめんどくさいし・・・。

（おい、何一人でブツブツいつてんだ？）

・・・。

俺の中には俺以外の奴がいる。それは俺が物心ついたところからいた。

（おい、ダイ。だから何考えてるんだよ？俺暇なんですけどー）

コイツはゴウ。長年一緒にいるが何かは詳しく知らない。

（なあ、お前時間は大丈夫なのか？）

（時間？何の話だ？）

（いや、目覚まし鳴ってから何分たったか知ってるか？）

（はあ・・・？何分たったんだよ？）

（10分だが・・・お前・・・遅刻するんじゃないか？）

・・・。俺は時計を確認してみる。

現在時刻 8時20分 目覚ましが鳴った時刻 8時10分

俺が家を出なければいけないのが、8時30分。

（ま、間に合わねえ・・・おい！なんで教えてくれなかったんだよ！）

（え？だって話しかけても無視したじゃねえか！）

ぐ・・・。そう言えばなんか言ってたなゴウ・・・。

ま、まあいい。とりあえず急いで準備せねば・・・。

「って、やること多すぎるだろおおおおおお」

俺のとある一日はこうして始まったのであった。

「ギリギリセーフか・・・あぶねえ・・・」

俺は席に着き教科書等を机の中にいれる。

「よう、珍しいな。お前がこんな時刻に来るなんて」

「ああ、色々あってな。」

コイツは俺の幼馴染の黒川春樹^{くろかわはるき}。ガキの頃からの付き合いで、ゴウのことを知る数少ない人物だ。

「ふーん、まあいいけどよ・・・ゴウは何も言わなかったのか？」

後半部分は声を小さくして聞いてきた。

『ああ、コイツ俺のこと無視して考え込んでるんだぜ朝からよ。』
まあ俺の身体を介して喋ることができたりするけど学校では控えてほしいな・・・。

「ふーん、そっかー。で、ダイは朝から何？考え事ってさ。」

「いや、なんでもないよ。気分的というかなんというか・・・」
キンコンカンコンコン

「おし、全員席座れー、出席とるぞー。」

担任が教室へ入ってきた。

ハルは席へ戻っていった。

放課後になった。

（おーい、ダイ。帰って何するよ。）

ん？そりや家事とか買い物とかすることなんていくらでもあるだろう。

ちなみにハルは部活だ。空手部に入ったとか言ってたな・・・。

（ふーん、じゃあいいか。）

ん？何かあったのか？

（いや、気のせいだと思うし、気にしないでくれ。）

えー、気になるじゃないか。教えてくれよ。

（んー、いや気のせいだと思うし、まあ気のせいじゃなくなったら教えるよ。）

まあいいか。ゴウがそういうなら・・・。

家についた。

「ただいまー」（ただいまー）

まあ、誰もいるわけないか。今頃家族は・・・海外旅行満喫してんだろうなあ。

（お前はさー、なんでついていかなかったんだよ？）

え？決まってるだろ。俺日本食大好き。海外の料理で食えるもの少ないし、なんかダルくね？

（まあ、ダルいつてのはわかるけどさ・・・）

それに一人の生活というのもいいものだろ・・・

（寝坊して遅刻しかける生活がいいものなのか。）

それを言われると何も言い返せないので黙り込む。

（腹減ったー）

じゃあ飯先にするか。

（おう！）

・・・夕飯は唐揚げとひじきだった。

さて、勉強でもするか。

時刻は午後9時30分。外は既に暗い。

俺は机に向かう。さて、予習するか……。と、その時携帯が鳴った。この着メロは……

「もしもし？」

「うん、もしもしー。今何やってるー？」

「今？ 予習をしようとしているところだが。」

コイツは赤井夏希^{あかいなつき}。俺の幼馴染その2だ。まあ当然ゴウのことは知っている。

「ねー、ちょっとゴウだしてくんない？」

だってさ、ゴウ。呼ばれてるぞ。

『よう夏希、なんだいこんな時間に？』

「ちょっと聞きたいんだけどさー、家になんか紫に光る玉が落ちててさ、宝石とは違う感じでさ」

『さあ？ 俺は知らないぞ？』

だが、聞きたくなってしまう気持ちにはわからなくもない。時々、俺らが知らないことを知ってるからな。

「えー、なんかさーハルも似たような見つけたって言うからダイちゃんところでもあるのかなーって」

『！！』

無言で部屋の机の隅を漁り始める。

げ、あったぞ……。しかもなんか白いし……

『やっぱ見間違いないじゃなかったのか……。』

ん？ 見間違い？ あれ？ 帰りのときの話か？

『ああ、そうだ。ちょっと見覚えがあってね。』

え？お前昔見たのか？俺の身体に来る前か？

「ねー、あったのー？なかったの？」

あ、夏希のこと忘れてた。机の上に放置してある携帯を手取るあれ？ゴウ？どうした？

『いや・・・これはどうしたらいいんだろうな、と考えててだね。』

「え？何か知ってるの？」

そうだぞ。知ってるならなんか教えろよ。お前だけ知ってるなんて不公平だ！

『いや・・・知ってるといえば知っているが・・・これは・・・』

「ハルにも一応伝えとくねー、今日はなんか眠いしさー」

『ああ、後日きちんと説明しよう。俺の過去についても少し触れるがしかたないな・・・』

え？ゴウの過去？すげえ気になるんだけど。

『だが全部は言わねえよ。少しだけだ。これの正体を知りたいんだろう？』

「わかったー、じゃあ話す準備できたら教えてねー、おやすみー」
通話が切れた。にしてもこんなことがキツカケでゴウの過去聞けるなんて・・・

（これがあるってことは・・・、おいもうひとつあるはずだ、探してみろ。）

とりあえずゴウの指示に従い探してみる・・・

俺はベッドの下や机の隅、たんすや押入れ色々探した。だが見つからなかった。

ねえじゃん！と、思いつつ俺は引き出しの中を漁る。

ないだろうと思うけど一応ゴミ箱の中・・・いやいやまさか・・・とか思ってたならゴミ箱に足が当たってしまったらしくゴミ箱が倒れた。

あーあ、中身がでちゃってるよ・・・まあ基本プリント類だから害はないけどさ・・・

（あ、あったぞ）

え？嘘だろ・・・と思いつつ俺は散らばった中身を調べる。
そしたら・・・銀色に光る玉があった・・・。

（ほらな、言ったとおりだ。まあとりあえず机の上においておけ。
もう遅いし寝るぞ）

ん、確かにもう夜も遅い・・・寝るか・・・
まあ色々疑問もあるけどゴウが今度教えてくれるというし・・・まあいいか。

大樹が眠りについた頃にゴウは身体を借りた。

『ああ、やっぱなっちまったか・・・。』

机の上にある白と銀の玉を指でいじる。

『なんとかなんねえかなあ・・・。』

と、思いつつ俺は部屋の中に違和感を感じた。

その正体はすぐにわかった。この暗い部屋の中で緑の光がたんすから漏れている。

『ツチ。んなに急かさなくていいだろう。だがこのタイミングでこの玉・・・』

俺はたんすを開ける。そこにあったものはまるでその空間だけ緑に塗りつぶしたようなもの。

手で触れることはできない。だがその緑の中に手が入っていく。ゴウは手を戻した。

『本当・・・コイツらは巻き込みたくなかったんだがな・・・』
そう呟いてゴウは大樹の身体を返す。

俺の人生に一番影響を与えた日（後書き）

うん、あれだね、いつまで続くんだろうねこれ。
まあ俺次第なわけで・・・んー。

俺の人生の分岐点とも言える日（前書き）

うん。連続で更新とか自分でも結構頑張ってると思います。

gd gd になることは目に見えてわかってるので・・・

なんとかしてえな。

俺の人生の分岐点とも言える日

朝か……。ああ、眠い……。

昨日そういえば……。

何かあったような気がするぞ……。

なんだっけ……？

（おう、起きたか。ちなみに昨日あったことは夢じゃないぞ）

うん、わかってるよ。ただ夢だといいなーって思ったただだよ。

（ふむ、どうしてだ？）

だって、なんか明らかおかしいじゃんあの玉、嫌だよ関わるの。

（……………）

っと、そんなことを考えてる時間があるなら、学校行く準備しねえと。

朝飯はトーストだった。

教室に入る。いつも通り席につく。

春樹が俺のほうへ来て話しかけてきた。

「なあ、結局あの玉はなんなんだ？」

『それについては明日の土曜日に話す。昼頃に家にきてくれ。いきなり出てきやがった……。まあいいけどさ。』

「ん、了解。夏希には伝えとけばいいか？」

『ああ、そうしてくれ。』

で、明日俺は昼前に起きなければいけない、と。勝手なことをしやがって。

（まあそう言うなよ。明日が一番ベストなんだよ。）

「そういえば昨日宿題出てたな。」

急に春樹はそう呟く。これは……。

「なあ写させてくれ！」

「断る」

即答である。その回答を聞き春樹はこの世の終わりみたいな顔をした。

「頼むよお。だってあの教師宿題忘れると1時間授業を立ちっぱで受けさせるんだぜ？」

「知ってるぞ。だから俺はあの教師が担当する科目では一度も宿題を忘れていない。」

（そういえばハルは時々立ってるな。）

それにあまり忘れがひどいと目をつけられてしつこく当てられたりするぞ。

（かわいそうだな・・・だが忘れたハルが悪い。）

だろ？ 見せる必要なんてないだろ？

「俺はもうあんな羞恥プレイ嫌なんだよお！！」

『じゃあ宿題してこい！』

俺の気持ちをゴウが代弁してくれた。うん、俺のセリフ返せよ！

（まあ気にするなよ。言いたくなっちまんのだ。）

じゃあいいか。

春樹は1時間立ちっぱなしだった。何故か俺を睨んでいた。

おかげで俺も当てられた。クソッ覚えてろよ・・・

放課後になった。

「ああ疲れたー」

「ああ疲れたよ、お前のせいで恥ずかしい思いしたし。」
それは宿題をやっていないお前が悪い。

（で、今日の夕飯何にする？）

そうだな・・・明日は昼飯食わないとだしな。カレーでいいか？

（ああ、いいぜ）

「んじゃ、俺は部活へいつてくるー」

「ああ、いつてら。明日忘れず来いよー」

「ああー、じゃーなー」

「ごちそうさま」

夕飯も食べたし片付け終わったし。することないな。

（ふむ、じゃあ寝るか。この位に寝たってお前明日起きれる自信ないだろ？）

それはそうだが・・・どうせ説明はお前がするんだから俺寝てても問題なくね？

（俺、二度も同じ説明したくないぜ。）

そうか・・・じゃあ少しゲームして寝るか・・・とりあえず春樹と夏希にメールをしておこう。

「明日は昼飯俺の家で食おう。何か持ってきてくれると助かる。あ、俺の家カレーと飯とサラダだけなんで。

それをふまえて何か持ってきてくれよ。いいな？じゃあ寝る。おやすみ」

「送信っ、と。さて寝るわ。んじゃおやすみなゴウ。」

（ああ、おやすみ）

深夜。ゴウは身体を借りてまたたんすの中を覗く。

『はぁ・・・こんなことに巻き込む以上全力出さなきゃいけないんだよな』

俺は机ほうへ向かう。机の上の白い玉を撫でる。

『にしてもどこで見つけたんだこの白い玉。隠しといたはずなんだが』

期日は後3日。考える時間が少なすぎるか？こんなことならもっと早くに全部話しておくべきだったのかな。

『まあなるようになるしかないわな。』

そういつて俺は身体をベッドの中に戻し身体を返す。

俺の人生の分岐点とも言える日（後書き）

うん、あれだね。本当・・・俺これどうしよう・・・

俺が人生でそこそこの重要な決断をした日（前書き）

どうしてこうなったんだろう・・・

とりあえず1週間に1話くらいのペースは保ちたいです。

「うん」「おう」

二人はテーブルがある部屋へ行った。

そんなやりとりをしている間にカレーは温まっていた。

「よし、温め終えた、そっちいくー」

そう大きな声でいいながら俺は鍋を持って移動する。

食卓。3人はカレーを食べている。

ちなみに夏希は福神漬け、春樹は長ネギを刻んだものを容器に入れて持ってきた。

「春樹さ、ネギ好きなのは結構だけど・・・こう、ね？さすがに・・・」

「ん？なんだよ？美味しいじゃないかネギ！食えよ、ほれ」

俺のカレーの中にネギが投下された・・・泣きたい。いや嫌いってわけでもないんだがね。

「ハルは本当ネギ好きだねー」

などと言いながら夏希は自分のカレー入れられないように少し距離をとっていた。

セケエよ夏希・・・。

さて、俺はカレー食い終えたし、そろそろゴウ説明してくれよ。

(・・・ん？ああ、わかった。)

『んじゃそろそろ話をはじめようと思うが・・・いいか？』

「待ってくれ、ネギを味あわせてくれ」

『よし、はじめよう』

「スルーかよっ！」

夏希は既にお茶を飲んでまったりしている。

「私はいいよー」

『・・・なんか話すのめんどいし、質問に答える形でどう?』

いきなりめんどくさがりはじめたぞ……。まあいいか。

「はい、質問です」

『なんだね? 夏希くん』

しかも妙なキャラまで作ってるぞ。

「結局この玉って何なんですか」

『それは、武器だよ。』

「「武器?」」

『ああ、武器だ。それは契約した持ち主次第でどんなモノにだってなれる。』

つまり、俺が望めばこの玉は核にだってなる・・・と?

『だが色々ルールはあるぞ。それはまあ、またの機会に説明するさ。』

そう言い。ゴウは夏希の持ってきた福神漬けを素手で食い始めた。

『まあとりあえず武器だということだけ覚えていてくれ。ほかに質問は?』

「んじゃ、質問だ。」

『なんだね、ハルくん』

いや、もうそのキャラ作りはいいからさ!

「そんなことを知っているゴウ・・・お前は結局何者なんだ?」

それは俺たち3人がゴウのことを知ってから一度は疑問に思ったことである。

今までなんとか聞いたがゴウは全く教えてくれなかった。

だからこの質問は春樹ではなく、俺が聞いたかもしれない、夏希が聞いたかもしれない。

ただ、春樹が聞いたただけだ。答えがくるといいな――

『スマンな、知識の類は覚えているんだが自分のことを何一つ思い出せないんだ。』

「記憶喪失ってやつか？」

『ああ、多分。お前らに聞かれても答えなかった理由はこれだ』

ああ、ゴウから言わせると正体を聞かれて「記憶喪失でわからない」なんて答えは恥ずかしいんだろう。

『だが今回は答えると言ってしまったからな。思い出したら教えるよ』

なら、俺からも質問だ。この玉と契約することはできるのか？できるとしてそれはここでできるのか？

『ムリだ。こことは別の世界・・・いや、異世界と呼べばいいのか？んー、まあこことは別の世界でしかできない』

つまり異世界があるって？

『ああ、異世界はある。それも一つや二つじゃない。何百とある。ここもその何百とある世界のひとつにすぎない。』

「ゴウはこの世界の住人なのー？」

『いや、少なくともこの世界ではない。』

だが、なんでこの玉は俺たちのところへ現れたんだろう。

『その玉があれば異世界へいける・・・なんて事実はあるけど言わないぞ俺は。』

「つまり何故かは分からないが俺たちは異世界へ行く切符を手に入れたってことか。」

『そうだ。で、お前らは異世界へ行く気はあるのか？』

なんという超展開。いきなり異世界へ行くことができるようになったも困るだろ！

「学校とかはどうするの？親の説得だってしないといけないんじゃないの？」

おお、夏希が俺の気持ちを代弁してくれたぞ。

『いつでも戻ってこれるぞ。たくさんの異世界がありその全てへいけるんだ。その異世界にここが含まれていないわけないだろ。』

「え？でも時間とかって・・・」

『まあ、そこらへんは後で話すさ。とりあえず行くか行かないかだ

け教えて欲しい。』

なんだろう、いつもと違って強引だぞ。まるで焦っているかのよう
な・・・

だが、行くか行かないか当然・・・

「「行くだろ」」

「あれ？ゴウ？どこいった？」

（いや、いますけど）

「急に戻るなよ！」

（え？なんかダルくなってきた・・・じゃなくて、えっと。）
要するに言い出したは良いけどめんどくさくなったのか。

（ただな、よく考えてくれ。武器があるということは命のやりとり
だってあるんだ。生きるか死ぬかの世界だってある。）

「ただな、よく考えてくれ。武器があるということは命のやりとり
だってあるんだ。生きるか死ぬかの世界だってある。」

復唱してみた。

二人はそれを聞いて無言になった。

（死ぬかもしれない世界へ自ら足をつっこむのか？それを考えてく
れ。明日1日だけ待つ。そして月曜日旅立つ。）

「1日考えて月曜日異世界へいくってさ。」

（明日1日でよく考えてくれ。月曜行かなかったら次ゲートが開く
のは2ヵ月後だ。）

まあ、これは言う必要ないだろう。俺は行く気だし。

「なんかゴウはもうでてくる気配なさそうだし・・・お開きだな。」

「ああ、そうだな。明日1日よく考えてみるよ。」

「そうだね。明日1日考えてみる。」

こうして俺たちの話し合いは終わった。

深夜

ゴウは身体を借りた。

『これで、いいんだよな……。』

たんすを開ける。ゲートはまだ開いている。

『このことを言うのは早すぎたのか……。？だが……。もう遅いんだよな』

巻き込んだ以上、コイツらを守るのは俺の役目か……。

それに嘘もついちまったしな……。

まあ……。あいつらはまだほんの少し知っただけで、ほかの事は知らない。

いや、俺が教えていないだけなのかもな、と呟きながらゴウはベッドの中へ戻っていった。

俺が人生でそこそこの重要な決断をした日（後書き）

もう、後の展開なんてこれっぽちも考えてないんだぜ？
考えないとだねー

俺が真面目に考えているとロクなことが起こらないと改めて思った日（前書き）

※キャラが中々増えない作品です。

俺が真面目に考えているとロクなことが起こらないと改めて思った日

昨日は・・ああ、そういえば異世界うんたら言ってたな、ゴウが。そういえばアイツの気配を感じない。どうせ寝てるんだろう。俺だって寝てたいが今日は色々考えなくてはならない。まああの場では「行く」と言ったが実際思うんだよ。

異世界がどんなにメルヘンだったりファンタジーだったりしたとしても、まだ見てるアニメが完結してないんだよね。

ああ、ひとつ言っておく。俺は別にヲタクなんかじゃないよ？

（そういうこという奴は大抵ヲタクだろ）

うおっ、急に出てきたぞ。んで、なんだ？お目覚めか？

（いや？今日はお前の人生の中でとても重要なことを迫られてそれについて考える日なんだぞ？）

そうだねえ、まあ考えてるねえ。

（それにこの件については俺は何も言う気はないんだ。お前の好きなようにしたらいいさ）

そう言っただけはまた戻っていった。

珍しく早起きをした。朝飯を食べよう

朝飯はホットケーキにした。ゴウの分も一応焼いておく。後で食ってもらうか。

side 春樹

「んあゝ、いい朝だ。」

昨日あんなことがあったが案外普通に寝れたし普通に起きた。ち

よつと驚いた。

現在午前5時12分

「さて、日課に取り掛かるとするか。」

俺はパジャマから着替えて、家族に「日課に行ってくる」と伝えて家を出た。

「1、2、1、2」

俺の日課と言うのは筋トレである。

毎朝ランニングをして、家に戻り、庭で腹筋、背筋、腕立て・・・
e t c

まあそういったことをして、朝飯を食べてそれからダラける。それが休日の過ごし方。

だが、今日はダラけたりしない。俺は荷物をまとめる。

俺は行くか行かないかなんて悩まない。行きたいなら行く、行きたくないなら行かなければいいだけだろ。確かに長期間の不在は家族に心配をかけるし、下手したら搜索願が出される。

だが、そのあたりはなんとかなるbyゴウ　ということらしいし、なんとかなるだろ。

ならなかったらならなかったで、親には事情を話して許可を貰おう。え？お前は学生だろうって？勉強なんてわからないし、今更遅れが生じて問題はないだろ？

というわけで荷造りだ。

とりあえず、下着とシャツの類はいるだろ。

次に暇つぶし用にマンガも欲しいな・・・

後はお菓子とか、カップメンとかいるな。異世界の食事が口に合わない困るしな。

そんなことをしている間に時間は午後4時26分になっていた。

「っと、そろそろ時間か。日課にいつてくるー」

と、俺は部屋を出て、一言そう告げて家を出た。

あ、日課っていうのは筋トレもあるが、まあ・・・腕試しみたなものだ。
ちよっと不良をこらしめて自分の弱さを・・・とかだったらよかったんだが実際は道場へ行くだけだ。

side 夏希

今日は、昼から出かけている。

正直なところ行きたいという気持ち5割、今の日常を生きたい4割、めんどくさい1割。

朝から考えていてけどやっぱり結論が出ないので昼からは気分転換に出かけている。

今私は公園にいる。そういえば小さい頃はよく遊んだっけ。

そして公園で少し休憩をして私は別のところへと行く。

今度は近くの書店に来た。中に入り色々本を見ていく。

漫画コーナーで足を止める。

「そういえば、新刊でてたなー」

漫画コーナーでもしろそうな漫画を探してみる。

家に帰って読んだらいい気分転換になるかな？

数冊漫画を手に取り私は漫画コーナーを後にした。

帰り道。気がついたらすっかり日は暮れていた。

書店のほかにもコンビニやゲーム屋、ケーキ屋などを巡っていた。

気がついたら結構荷物が増えていた。

現在時刻8時13分。

「やばいなー、絶対怒られるよ」

だからといって急ぐこともなく、私は歩く。

ふと後ろから視線を感じた。

「……ん？」

気のせいだと思うけど少し気になる。

だからと言って戻ってまで確認する勇氣はなかった。

私は少しペースを上げる。曲がり角を曲がり駆け出す。

すると後ろから何者かが走ってくる。

視力は良いほうだと思っていたがやはりこんなに暗いと見えない。

私は走り続けた。ここらへんは小さい頃から遊んでいて普通じゃ通ろうと思わない道も何度も通って慣れている。慣れればすぐく便利。私はスカートがめくれることにかまうことなく走り続ける。

少し疲れてきた。ペースを緩めることはせずに私は後に振り向く

「え!？」

思わず言ってしまった。さっきは暗くて見えなかったが今では輪郭くらいなら見える。

つまり近づいてきている……。

私はさらにペースを上げる。これでもか、という位の速さで走る。

「はあ、はあ……」

正直限界だった。もうムリかと思った。そんなことを思っているうちにペースが落ちてくる

(やばい、追いつかれる……!)

だが、遅かった。私はとうとう追いつかれ、追い越された。

そしてストーカー(?)は何かを呟く。

「……を……せ……」

なんていってるんだろう。とりあえず私は二人にメールしておこう
と思い携帯を取り出す。

相手はまだ何かを呟いている。まだ間に合う。私は現在地とメッセージを書き、送信した。

すると男が襲い掛かってきた。

訳が分からなかった。だが、相手が近づいてきたことで相手の声が

聞こえたた。

「お前が持っている玉を、俺に寄越せ。」

男は確かにそう言った。

玉……え、なんで知ってるの？

何もできなかった。私はあつさり捕まつた。

そして男がこちらに手のひらを向けた。

その瞬間、私は何かに当たった。

そして意識を失った。

S
i
d
e
春樹

道場からの帰り、いきなりメールがきた。

夏希からだった。とりあえず読んでみる。

俺は読み終えた途端ダツシユした。

現在地がわかっているれば後は行くだけ。

身体鍛えててよかった、って思った。

そんなことより玉を狙っていることのほうが不思議だった。

そんなことを考えているうちに目的地の近くに来ている。

夏希は既に拘束されている。

「何してんだあああああ」

俺はダッシュして相手を殴り飛ばしにいった。

だが、相手動じることなく俺を見ている。

（・・、なめてんのか）

俺だって格闘技をやっている、それなりの強さに自信を持っている。
なのにこいつは・・・

「くらええええええ！」

俺は今までの中でそこそこ良いと思えるストレートを放った。

だが、相手に俺のストレートは届かなかった。

そう、相手の少し手前で拳が何かにあったのだ。しかもめっちゃ堅い。

「いってええええええええええ」

男はこちらに手のひらを向けた。

その瞬間、何かが俺を襲った。

「ぐおっ……。んだよ、これ」

目には見えなかった。こんなことありえるのか？

「ふん。余計な手間かけさせやがって」

男はなにやらやっている。

そして夏希を担いで、後ろに現れた緑の光の中へ消えていく……。俺が最後に見た光景はそれだった……。

俺が真面目に考えているとロクなことが起こらないと改めて思った日（後書き）

基本主人公視点から書くつもりですが、どうしても別キャラ視点から書くこともあるかなあ・・・。

まあ基本主人公視点からだけどね！

俺へ言っではいけないことをこの日、多くの人々は学んだ日・・・だと思おうよ

なんか色々暴走する回。まあ暴走理由とかも後で書けたらいいな
ーとか思ってます。

俺へ言っではいけないことをこの日、多くの人々は学んだ日・・・だと思おうよ

丁度俺が夕飯を食い終えた頃に夏希からメールがあった。

内容を見る。ふむふむ、つまり夏希は今大変ピンチということか。

俺は何があるか分からないのでとりあえず部屋に戻り携帯とカッターをポッケにいれて家を出る。

（おい、カッター持ち歩くとか、お前のほうが不審者だわ。）

何も聞こえてないんで。

案外目的地にはすぐついた。小さい頃3人でよく遊んでいたあたりだったからだ。

ここまで来ると逆に足音を鳴らさないようゆっくり歩くべきだと判断し、俺は歩みを遅くする。

あれ？夏希いねえじゃん・・・なんだ、ジョークか。

そんなことを考えて俺はその場を後にしようとした。

（おい、あれハルじゃねえか？）

・・・じーっとゴウが示した場所を見る。ん？確かに人が倒れている。

だが、あの春樹に限ってこんなところで倒れているとは信じられなかった。

（まあ、いいから。それに普通に人倒れてるなら救急車くらい呼んどこうぜ）

そうだな。俺はその倒れた人影のほうへ歩く。

そこにいたのは春樹だった。え？嘘だろ？だってあの春樹だぞ？一体なにがあったんだよ。

春樹は格闘技を色々やっていて、毎日走ったりしてるし、何より、

このあたりでコイツに勝てる奴はいない、とまで言われているんだぞ……。

（とりあえず家まで連れて帰って意識が戻るのを待つんだ。幸い目立った傷は……ん？）

どうしたゴウ？何かあったのか？

（とりあえず家へ連れて帰ろう）

ああ。そうだな。

俺は春樹を担ごうか背負うか迷っていた。これは結構悩みどころだ……。

（んなこたぁいいから早く連れて帰れよ！）
ですよねー

結局背負って帰った。

「……ん？あれ？ここは……俺の部屋ではないな……」

「おう、目が覚めたか。」

「ん？あ、大樹か……ん？あれ？何か忘れてるような……？」

『結局夏希はどこ行っただ？ハル、お前何か覚えてないのか？』

「あー……、そうだ、夏希がさ連れ去られたんだよ！」

「いや、んなのわかってるよ。お前は どうしてあそこで倒れてたんだ？」

「ああ、そのことかそれはだな……」

春樹、二人に自分が体験したことを説明中。

「つまり、ストーカーが夏希を連れ去ったってことでいいんだな？」
「ああ、後俺は見えない何かにストレート弾かれたり、見えない何か喰らったりと・・・」

『んで、ソイツは緑の光の中に消えたのか？』

「ああ、確か・・・だが、んー、言葉じゃ説明しにくいんだが・・・」

（身体を借りるぞ）

ああ、問題ねえよ。

ゴウは身体を借りると立ち上がり、たんすの目の前まで移動する。

『お前が見た光ってよ、こんな色じゃなかったか？』

たんすを開く。そこには・・・

「あー！ー、それ、そうそう。そんなだった」

え？なんでこんなのあるんだ？確かにたんすなんて日頃使わないけど・・・。

ん？同じ？てことはだ・・・

春樹も同じ考えに至ったのか、ゴウに問いかける。

「なあ、その光に入れば夏希のいるところにいけるのか？」

『それはわからないが、お前が見た色と完璧に一致しているなら同じ世界であることは間違いない』

春樹はその光を観察する。ふむ、とうなずくと

「スマン、正直意識失う直前で覚えてないんだわ。だが、行くだけの価値はあるんじゃないのか？」

『ああ、そうだな。で、ダイ。お前は行くのか？』

・・・そう、俺は恐怖しているのだ。

あの大樹を倒したというやつがいるんだぞ？下手したらそんなのばつかな世界かもしれない。

そんなところへ俺が行って何の意味があるんだ？

だが、行って夏希を助けてやりたいという気持ちもある。俺はどうしたらいいんだ・・・。

が、ここで行かないなんて言えるわけもなく、俺は付いていくこと

にした。

「それじゃあ・・・って、どうやっていくんだ？」

そういえばそうだ。俺も方法は聞いていなかった。

『とりあえず光に突っ込め』

「あ、ああ・・・。」

不安だ・・・。春樹も不安がってる。そりゃそうだろ。だって・・・ねえ？

普通にたんすの中に突っ込めなんていわれて素直に突っ込めるか？だが俺はあえて突っ込んだ。

「あ、おい待てよ。置いてくなって」

春樹もたんすに突っ込む・・・いや、もはやダイブというような感じでつつこんだ。

俺は光の中に入った瞬間「なつかしい」と感じてしまった。

なんでだろう？まあいいか。そんなことより俺は家のことのほうが心配だよ・・・。

「・・・」

ここはどこだ？てかおかしいでしょ？なんでいきなりめっちゃ豪華な部屋に出ちゃうの

「なあ・・・俺たちって確かに光に突っ込んだよな？」

「ああ、少なくとも俺は突っ込んだ。」

見た感じ兵士の特徴をとりあえずあげてみる。

武器は槍。盾はなし。体格はまあまあ。鎧の類をつけているがなんとかなる範囲。顔は覆われていない。

ふむ。俺は春樹みたいに鍛えてないから鎧に攻撃したらまず痛い。故に狙うなら顔だ！

「怪しい奴がいるぞー！ー！ー！ー」

あ、なんかまともだった。いきなり「刺すぞ！」じゃないだけマシだろ。

（とりあえず、跳び膝蹴りだな。）

分かってるって。この程度ならなんとでもなるだろう。

（せーのーでっ！）

俺は跳び膝蹴りを・・・外した。が、計画通りだ。俺が跳んだその先は壁。相手は俺が外して油断している。

そのまま壁を蹴って背中に跳び蹴りを・・・いや、三角跳び蹴りか・・・？まあいい。とりあえず攻撃する。

「クソツ、痛てえじゃねえかテメエ！」

「うっさい、こっちは真剣なんだよ！」

春樹の方をしてみる。

「うおらあああああ」

アイツは本当・・・すごいぞ。もう槍なんて眼中にない感じだぞ。

しかも最初に倒した奴の奪って使ってるし。

そういう槍も使えたんだったな。しかも結構倒してる。そういうこの兵士がさっき人を呼んでたな。クソツ！

ゴウ、バトンタッチだ。

（任せる。日本で俺が全力出すと色々マズいからな、ここでもら問題ない。）

まあ、鍛えてないのに三角跳び蹴り（？）なんてことができた理由は・・・今回想してる場合じゃねえな。

「なめやがつてええええええええええ」

ああ、そうしてくれ。強いと逆に注目を浴びそうだからな。

相手は槍を持つてゐるのに何故か蹴りで攻撃してきた。

だが蹴りは受け流される。そのまま足を掴む。引っ張る。バランスを崩す。手から離れた槍を拾う。喉で寸止め。

『コイツの命が惜しければ攻撃をやめろっ!!』

春樹はこっちへ向かって走ってきた。

お前も十分すげえよ春樹。なんであんな数相手にできるんだよ！

ちよつと泣きかけてる春樹であつた。

『コイツの命がどうなってもいいのかっ!』

「なんだ？」

「お前らは何が目的だ？ どうやってここへ侵入した？」

その問いを聞いて兵士は……いや、後ろの兵士たちも皆「ポカ―

「おいおい、正気か？ここを知らないって。」

39

に当てることなんて造作もないんだぞ？」

「ふん、おもしろい。やってみろよ。言っとくがここは王城だぞ？俺だって腕に覚えはある。」

『王城？この程度の戦力でか？』

ゴウは相手を睨む。相手も睨み返してくる。何これ。相手めっちゃ怖いんですけど。

「ふん、ほらやってみろ。このクソチビがよお！」

後ろの兵士どもはそれを聞いて笑い始めた。

どうもこっちがコイツを殺せないと思っっているようだ。確かに殺す気なんてない。が、コイツらもう終わったな。

春樹は手にしている槍を俺に・・・いや、ゴウに渡す。

ゴウは無言で受け取る・・・が、もう春樹泣きそうだよ。めっちゃ殺気出てるよ俺の身体。

『・・・・・・・・・・』

無言で春樹を睨む。が、春樹はその視線の意味を悟った。

「あっはっはっは。ほら、殺してみろよクソチビがよお！」

ゴウ・・・殺す一歩手前までなら許す。俺が許可する。全力で潰しにかかるぞ。

（言われなくても！だが一歩手前でいいのか？ま、今変更なんて聞かねえけどよ！）

春樹から受け取った槍を廊下に刺す。それが合図だ。

まず春樹は人質にされて、寸止め状態で若干気を失いかけてる兵士の股間を踏む。

男は悲鳴を上げる。完全に意識を失う。その悲鳴と同時に笑いが収まる。

廊下に刺していない槍を目の前の兵士に投げつける。狙うは足だ。

投げた槍は足ではなく太腿を貫通する。・・・どんだけ本気なんだよ。

「う、うわあああああ」

『さっきまでの威勢はどうしたんだよ？』

後ろの兵士たちが襲い掛かってくる。地面に刺した槍を引き抜き、また投げる。

今度は逆の太腿を貫通。・・・後2本調達だ。

『春樹！！』

春樹は無言で相手を迎え撃つ。もちろんゴウもだ。

とりあえず邪魔なので投げる前にコイツらを殺るぞ。

春樹は顔面にストレート放ってる。おう、一発で気絶とかさすがだよ。

そして槍を奪ってはこちらへ渡す。受け取った槍を手当たり次第に投げていく。

それでも全部命中する。既に半分くらいは気絶している。春樹がやっただろうな。

だって俺らは・・・

『おら、動けよ！王城の兵士なんだろう？この程度でくたばるのか？ああ？』

とか言ってそれなりの苦痛を味あわせてから気絶させる。他の兵士は、春樹のほうへ襲い掛かるかそれを見るかの二択だ。

近寄れば何されるか分からない、ということが分かっているのだろう。まあ全員刺すけど。

俺たちの目的は「脱出」から「コイツらを殺る」ことになっている。

『さて、お前ら・・・全員動くなよ？動いた奴から刺す。動かなくても手当たり次第刺す。』

兵士たちは多少遊んでから片付けた。なんせ本命は・・・この兵士だからな。

ちなみにこの兵士太腿に刺さった槍が貫通して廊下に刺さってて抜こうにも抜けない状況である。

『おい、さっきなんて言ったかもう一度言ってみろや、おい』

「ひいいいひいいい何もいってませえええん」

「嘘ついてんじゃねえよ！言ったら！」「このクソチビ」って言うってたじゃねえか！」

春樹がそう言う。俺は頷く・・・まあ身体は動いてないけどね。ゴウは無言で槍を刺す。今度は両腕だ。そう兵士全員の槍を回収して、それを春樹が持っている。

途中で代わってもらう。俺は無言でこの兵士に槍を刺す。

「春樹、残り全部よこせ。」

春樹は無言で俺に渡す。ふむ、結構あったと思ったがもう4本か。他の槍はコイツの腕や太腿など、ようは四肢にまんべなく刺さっている。

「さて、どこがいい？今なら選ばせてやるよ。」

男は無言である。痛さのあまり気絶したか？俺は刺さっている槍を3本くらい抜いてまた刺す。

男は痛みで起き上がる。なんで生きてるんだろうなこいつ。

『おら、誰が気絶していいっていったんだ？』

ゴウにバトンタッチだ。ゴウはまず相手を押す。そう、こいつめっちゃ刺さってんのに立った状態なんだぜ？

ぐちゃっ　とか　ばきっ　とか聞こえたけど気にしない。

見るも無残な光景だ・・・って言葉はきつとこういう時に使うんだろうな。

春樹はコッチを見ていない。気持ち分かる。がコイツは言うてはいけないことを言ったんだ。

そして槍を足の裏へ刺す。ふくらはぎから先がでてきた。

『ツチ。王城の兵士なんだろう？もっと根性見せろや！』

だが言葉は届かない。こいつ絶対死んでるって。あーあ、一步手前って言ったのに。まあ止める気はなかったが。

数本槍を抜く。そう、気がついたら城中の兵士がここに集まっている・・・が、皆青ざめている。

『こうなりたくなかったらこの城の主を話せる場をセッティングしろ』

そう言うとは兵士たちは皆同じ方向へ走っていった。ああ、大臣が王に言いに行くんだろう。

「って、え？ 脱出するんじゃないのか？」

『いや、この国がどこかだけは把握しとかなければならない。』

「まあいいけどさ。にしても強いなゴウ。」

『何、俺程度の強さなんて世界中探せばどこにだっているもんだぞ。』

などと会話をしつつ俺たちは兵士が向かっていった方へと歩いていく。

俺へ言っ**て**はいけないことをこの日、多くの人々は学んだ日・・・だ**と**思うよ**う**

はい、なんか完全勢いです。戦闘シーンとか始めて書いた・・・。
まあ全体的な描写がもつとうまく表現できるように頑張りたいな。
というわけで少しずつよくなるといいなあ・・・

次は王様とバトルか。槍で王様を刺してその国の王になる大樹。
なんて展開はありません。残念です。

人間、誰にだって言われたくないことはあるんだよ！それを言っちゃダメなんだ

どうしよう・・・もう続き思い浮かばないorz

後、今更だけど、俺、キャラの容姿について何も触れてない・・・。

まあ、近いうちになんとかします。

人間、誰にだって言われたくないことはあるんだよ！それを言っちゃダメなんだ

その部屋は俺たちがゲートから出てきたときの部屋より豪華だった。まあ、ただの学生だった俺らは「豪華」の一言で済むが、専門の人とかは詳しそうだな。

というわけで現在、王様とお部屋です。

ちなみにゴウは怒り狂って暴れまくって疲れたので寝るとのこと。

「失礼しまーし」

入ってから言っても遅い気がするけど気にしない。

王様は椅子に座ってた。うわ、すげえ気持ちよさそう。

「……………」

王様は無言で俺らを眺めている。

「何でしょうか？」

「…………ふむ、小さいなおぬし。」

俺を指差してそんなことを呟いてる。もちろん聞こえています。

俺はその場からダッシュして王様の目の前に移動する。

机を殴る。ボコッ。机がへこむ。

「今なんと言いました？」

一応この国の王だ。それっぽい敬語で対応する。

ちなみに春樹は「我関せず」の態度を取るつもりらしい。

「だから、おぬしはあっちのに比べると小さ」

言葉が途中で途切れたのは俺がアイアンクローをしているからだ。

「それで、今、なんと、言いましたか？」

俺は笑顔で問いかける。空いてる手で机を殴る。バキッ。あーあ、壊れたよ机が。

王様は引き攣った笑みを浮かべている。アイアンクローをやめて返答を待つ。

「わ、悪かった。何か失言をしたのなら謝ろう。その身長差だとおぬしも辛いだろう？」

再びアイアンクロー。机を蹴る。ドガッ。壁にぶつかって、壁がへこむ。

「まあまあ、コイツとこんなことしてるより、夏希探すほうが重要だろ?」

その通りだな。俺は王様を投げる。あれ?前より筋力ついてる?

ゴウが俺の身体で暴れた後はいつも筋力アップした感じがする。

まあ、そもそも過去数度ゴウが暴れてるから俺の身体は鍛えてないのにあそこまで強いんだがな。

「ふう……。まったくいきなりなんじゃおぬしは!」

「ゲートをでたらあゝここにいてえゝぼくたちいゝなにもおゝしりませえゝん。」

なんて言ってみた。春樹は笑いをこらえてる。どう?うまくない?王様めっちゃ顔が不機嫌。でもアイアンクローが怖いのか何も言えない様子。

「とりあえず、謝罪ください。」

「いきなりすぎるだろっ!」

「すいませんでした。命だけはとらないでください。」

『いいだろう、だが次があると思うなよ?』

急にゴウが出てきた。あれ?寝てたんじゃ?

(いや、ほら、情報聞いたりしないといけないだろ?)

なんか納得できねえ……。けど任せる。

『それでは自己紹介といきましょう。俺は井沢大樹。異世界からこの世界へ来ました。』

「俺は黒川春樹。コイツと同じ世界から来ました。」

「私はこのラベルン国の王、アラクだ。」

・・・とりあえず異世界のネーミングセンスエ・・・。

「それで、おぬしらは何故我が城に?いや、まずどうやって我が城の内部に?」

ゴウ、コイツに全部話すのか?

(ダメだ。全部は話さない、テキトーになんか言っておく。)

春樹はあんま喋るなよ、と目で訴える。伝わったようだ。

『俺は・・・いや、俺たちは異世界から来た。ゲートをくぐったらこの城の内部だった。』

「それを、信じるとでも？」

『だが、王城なんてものに俺らみたいな若者二人が侵入できるわけもないでしょう？』

いや、ここなら割と簡単な気がする。

「だが、おぬしらはこの城の見回りを全滅させたようではないか。」

『騎士団とかではなくただの見回りでしょう？もう少し訓練を積みせるべきだと思いますよ？』

「それで、おぬしらは何が目的なのだ？異世界から来るほどだ。それなりの目的があるの难道？」

『いえ、特には。ただそこにゲートがあったからくぐっただけですけど、何か？』

「ほう、おもしろいことを言うな。」

王様の顔の手前まで手を持つてく。

王様めっちゃビビッてる。そりゃそうだろ・・・。

『本題だ。この世界のことを知らないから情報をよこせ。そしたら勘弁してやるよ。』

「わ、わかった、おぬしらの質問には答える。だからその手を引っ込めてくれ！」

『引っ込めて？引っ込めてください・・・じゃねえのか？』

まあまあ、そんなこと言ったら話が進まないからさ。

（ツチ、しゃあねえな。）

ちなみに春樹は出されたお茶や菓子を食べた。

俺も少し食べた。とても美味しかったです。

こうして俺たちは聞くだけ聞いて城を後にした。

「で、これからどうする？」

『とりあえず、夏希は既に拘束されてると見て間違いないだろう。』
だから、と呟き

『とりあえず、数日はこの国に留まり色々準備をする。それにお前
らも契約しとくべきだと思う。』

契約・・・？

『春樹も忘れてったっばいな。』

「だがさ、あの城の兵士素手でも倒せたぞ。武器なんているのか？
それは俺も思った。

『あんなの下っ端だぞ。多分あれは見習い。』

「は？見習いが城の警護してるのか？」

『いや、違う。どうも今この国のほとんどの騎士は魔物狩りに行っ
ているようだ。』

「魔物？」

『ああ、あそこの山によく出没するらしい。』

そう言って指を指す。ああ、確かに山がある。

とりあえずどっかに宿取りたいんだが。

『そうだな、まあそういった話は宿ですか。』

そう言って俺らは歩き出す。

「代金は王にツケとけ。」

俺は受付の青年に向かってそう言ってやった。

「ふざけんじゃねえ！金がねえなら泊めることはできねえ！」

ロビーにいる連中もこちらを見ている。そりゃそうだ。ここらへんじゃ見ない格好だろうし。

それで言い争ってんだ。目立たないわけがない。

「あ？文句あんのか？」

「文句も何も金がないなら泊められねえ！」

ほう、ここまでプレッシャーかけてるのに怯むこともなくこっちに言い返すとは……。

と、そんなことを言い争っていると、女性がコチラへ向かってきた。「ああ〜もううるさいわねえ、これだけあれば3日くらいはもつでしょ？」

女はダルそうに懷から銀貨をジャラジャラと出す。

俺たちはその光景を「ポカーン」という感じで眺めている。受付の青年はそれを受け取り

「2名様ですね？お部屋はこちらでよろしいでしょうか？」

めっちゃ笑顔だった。なるほど。お金さえもらえればいいのか。

「あ、ありがとうございます。」

「……………」

女は無言でこっちを見ている。まあ浮いてるからな。服装が。

「あの女性は一体なんだったんだろう？」

「さあ？でも俺らラッキーじゃね？」

「だな。」

部屋はなんか普通だった。

いや、さっきあんな豪華なもの見たからそう感じるだけかもしれない。

「それで、どうする？」

春樹が尋ねてくる。ほれゴウ、出番だ。

『春樹の証言からして同じ世界にいることは確かだが詳しい位置までは分からない。』

『だが、することならあるぞ。まずお前らはこの世界の魔法を学んでもらう。』

え？ここと魔法とかあるの？

『ああ、あるぞ。詳しい説明は後ですが。とりあえず今日は街を見て回ろう。』

「そうだな。」

そう言っ、俺たちは街へ向かった。

俺たちは色々な店を回った。

いやあ、異世界はすごいねえ。

春樹も満足した様子。さて、後は宿へ戻り、シャワーを浴びて寝るだけだ。

宿へ向かっている途中、人垣ができていることに気がつく。

「ん？なんだろう？」

俺たちそっちのほうへ向かった。

「あ？金払えない？」

なんかいきなりそんなことを言うアホがいた。
ん？なにやら言い争ってるようだ。

「あんたがぶつつかってきたんでしょ！私は悪くないわ！だからお

金なんて払えない！」

「あ？俺らがぶつかった？言いがかりはよしてもらおうか。」

あっはっはっは、と男たちは笑っている。

ああ、そういうことか。なんだろう・・・こういうのはじめて見たわ。

「ま、嬢ちゃんは可愛いし、俺らを気持ちよくさせてくれるならぶつかってきたことは忘れてやってもいいぜ？」

男のうちの一人がそう言いながらその少女に近寄っていく。

少女は顔を真っ赤にしている。まあ怒り半分、恥ずかしさ半分と言った感じだろう。

ふむ、男たちは・・・だいたい10人か・・・。

まあ別に助ける義理もないが、春樹はこういうの見過ごせないし。いきなり殴りにかかろうとしている春樹を手で制し、「まずは俺が交渉してみるよ。」と目線で伝える。

「あの、そこでそんなことされてると迷惑なんですけど。」

いきなり言葉を間違えてしまった気がする。

「ああ？んだテメエ。」

よし、もう少し優しく・・・

「何かあったのですか？僕でよければ話を聞きますよ？」
すると少女が

「こいつらが私にぶつかってきたんだ！なのにコイツらがわけの分からないうことをいいはじめて。」

ふむふむ。まあ途中から見てたけどね。

「それで、あなたたちは彼女にあんなことや、こんなことをさせよう、と」

「ああ？金が払えないって言うから身体で払えって言ってやったんだよ！」

え？なんか間違えたか俺？意味一緒じゃね？

「えっと・・・」

すると男のうちの一人が

「うっせー！だいたいお前はこの嬢ちゃんとなんか関係あるのか？
ああ？」

「いえ、別に。」

即答である。だってマジで関係ないし。

「んじゃ、テメエはすっこんでろ！このチビガキが！」

・・・俺は目線で「春樹、俺7、お前3でいいか？」と尋ねる。

春樹はコクコク頷いてる。

・・・この国に来てからよく言われるなチビって・・・

そして少女に触れようとするおっさんの手を俺は握る。

「ああ？邪魔すんじゃねえよ！」

俺は顔面に一発パンチしてやった。

「うげふっ」

そのまま男を後ろの二人めがけて蹴っ飛ばす。

男3人が倒れてる・・・。キショッ！

さて、次は・・・って、あれ？なんか身体が動きません。

『チビチビうっせんだよお！ああ？チビで悪いか！ぶっころ』

バカ！そんなこと街中で言っちゃいけません！

（あ、ああ。そうだったな。で？どうする？）

色々見られるとアレなんで「少し強めの若者が少女を助ける」という設定が通じる範囲で。

了解、と呟くと、残り4人を一発で仕留めていった。

そりゃ、怒り狂ったこの身体の本気の拳を喰らってんだ。死なないだけマシだろう？

ちなみに春樹の相手は全員背負い投げでやられてた。

「助けてくれてありがとう。」

お礼を言われた。ちなみにあの男たちは今頃地面でいい夢見てるんじゃないのかな？

「何、困っている人を見ると助けたくなくなってしまいう性分だね。」キリッ

春樹がアホなことをやっている。まあアホだしいいか。

「私は、メアリー。よろしく」

そう言って頭を下げた少女・・・もといメアリー。

なあ？この世界って名字とかってないの？

（ああ、ないな。だから名乗るなら大樹だけでいいだろう。）
あれ？さっきフルネームで名乗ってたのはどこの誰だっけ？

（～～～♪）

まあいいさ。

「どうも、俺は大樹です。」

「俺は春樹です。」

俺らも頭を下げる。

「まあ、ついでだし、家まで送るよ？」

「あ、私この街には立ち寄っただけで、基本は姉と旅をしているんです。」

「へえ、じゃあ宿？」

「あ、はい。今は宿に泊まっています。」

「じゃあそこまで送るよ。」

「いえ、そんなご迷惑じゃ・・・？」

「いや、別に。春樹、別にいいだろう？」

「ん？ああ問題ない。」（キリッ

・・・ちよつと殴っておいた。

「それじゃ、お願いします。」

俺たちはメアリーを送り届けるため、メアリーが泊まっているという宿に向かった。

・・・ここ、俺らも泊まってるじゃん。

「へえ、メアリーここなんだ、実は俺らもここなんだ。」

春樹がそんな風に話しかけている。

「お二人もここなんですか？」

なんて、話をしていると

「メアリー！どこに行ってたの？すごく心配したんだから！」

・・・あれ？この声どつかで聞き覚えが・・・？

「あ、お姉ちゃんです。」

春樹は あっ！と言うような顔をしている。

「あら？貴方たちは確か・・・」

（お前覚えてないのか？宿の金を出してくれた女性だよ。）

ああ・・・って、確かに似てるかもな。

俺たちは軽く自己紹介をする。

「貴方たちがメアリーを助けてくれたの？」

俺たちはお姉さんの奢りで夕食をしている。

にしても美味しいな肉。

（ああ、こっちの世界の肉はすごく美味いんだ。）

ちなみに春樹は食べてばかりであり会話に入ってこない。

そして軽い世間話（と、言っても俺たちは聞く専門だけど）をしていると

「そういえば貴方たちの格好ってここらへんじゃあまり見ないわね。」

ゴウ、任せた。

（まあいいけどよ。）

『ええ、こことはとても離れた俺たちの故郷の衣服なんです。こっちの地方では珍しいかもしれませんね。』

「へえ、こっちはいつ頃？」

『今朝到着したばかりです。徒歩でしたからすごく疲れました。』

「徒歩で？　すごいわね貴方たち！」

ちなみにメアリーも食べているだけで話にはあまり参加していない。

「ってことは貴方たちは知らないのかしら？」

『知らないって？』

「最近この街を騒がせている通り魔のこと。」

『通り魔？　また物騒な・・・』

「でも、既に被害者もたくさん出てるわ。だからメアリーには宿から出ないようにつて言っておいたのだけれど・・・」

メアリーは頬を膨らませてる。可愛いな。

「でも、貴方たちも気をつけたほうが良いかもよ？」

『あ、ありがとうございます、お二方もお気をつけて。』

ヤベエ・・・誰だよコイツ・・・あ、ゴウか。

さっきまでの怒り狂ってるゴウからは考えられない。

そんなこんなでお食事会も終了し皆で宿へ戻っていったのであった。

「それじゃ、おやすみね。」

「あ、おやすみなさい、大樹さん、春樹さん。」

「ああ、おやすみ。」

「おやすみ」

なんか一日がめっちゃ疲れた。そりゃ朝から王城で暴れてりや・・・
さて、寝るか。

深夜。

「ふーん、あのボウヤたちね、異世界から来たっていうのは・・・」

「ああ、間違いない。何せ、この世で10個しかない異世界間を行

き来することのできるアレを持っているのだから。」

「そう、で、殺しちゃってもいいのかしら？」

「アレさえ回収できれば後はどうしてくれてもかまわない。」

「そう、わかったわ。それじゃ。」

「ああ、いい報告を待っているよ。」

とある部屋での会話であった、

人間、誰にだって言われたくないことはあるんだよ！それを言っちゃダメなんだ

とりあえず次回、契約する。

それで、この通り魔のところを終わらせたらキャラのステータス（

？）みたいなのも書いて投稿したいなあ・・・

武器との契約って案外チヨロいよね。(前書き)

やっ とヒロイン かけたよ！

武器との契約って案外チョロいよね。

ああ、いい朝だ。とても気持ちがいい。

春樹は・・・いねえ。ああ、そうか。アイツは日課のアレか。

ふむ、こっちにきててもキチントやってるのか偉いな。

（お前も何かしたら？）

断る。

「あ、おはようございます、大樹さん。」

「ん？ ああ、おはよう、メアリー。」

ロビーへ行くとメアリーと会った。

「あれ？ お姉さんは一緒じゃないの？」

「はい、何やら用事だとかで、朝早くに出かけちゃいまして・・・」

「へえ、用事か。じゃせっかくだし、朝ごはん一緒に・・・食べる

前に春樹を待っていい？」

「あ、はい。って、そういうえば春樹さんいませんね。どうしたんですか？」

「まあ、日課といいますが、癖といえますか・・・気にしないでくれ。」

そう言ってロビーで春樹を20分くらい待っていると・・・

「お、二人ともおはよう」

「おう、おはよう」

「あ、おはようございます、春樹さん。」

3人で朝飯を食べた。

部屋に戻る。メアリーも部屋へ戻っていった。

『んじゃ、契約について説明をする。』

ベッドの上で胡坐をかいてる春樹と俺。あ、もちろん一つのベッドで二人とかじゃないからね！

『まずは、玉を出してみろ。』

春樹はポッケを探る。見つかったらしく、それを出す。

『それに思念を飛ばせ。』

俺も春樹も「ポカーン」である。

『えっと、とりあえず、玉を持っている手から熱を放出するような感じ？』

再び「ポカーン」である。だが春樹は試しに、とやってみた。

「んんんんんっ！」

お、コイツいけるのか？

「ふはあゝ。ムリ。」

ですよねー！。

『ふむ、そうだな。これ、コツさえ掴めばすぐできるんだがな。春樹、手のひらから気を出す感じだ。』

気？おいおい、俺らの世界にそんなものがあるわけ・・・

「あ、なんかできた。」

ええええええええええ。

『まあ分かってたけどお前魔法あんまし向いてないな。』

「ひでえ！でも俺の武器はこの肉体だぜ。」キリッ

殴りたい！のに殴れない！クソウ。

『まあいいか、気のほうが案外お前に合うものが出てくるかもな。』
と、そんなことを思っていると春樹が倒れた。

『ああ、問題ない。意識が玉の中にいったただけだ。』

そういえばまだ全部説明してないんじゃないか。

『さて、次はお前だ。』

コイツ話逸らしやがった。まあいいか。

「ふむ・・・ムリだ。」

（はぁ・・・。）

「んー、なんかそんなようなアニメが昔あったような・・・？」
ああ、そうだ。あんな感じならいけるんじゃないか？

「せえーのーでっ！」

（成功だ。まあ、伝わってないと思うが。後はお前ら次第だ。）
ゴウは別の玉を懷から出した。

『ON』

そう呟くと白い玉が光だし、分裂し、二つの刀になる。

『ふむ、やはりか・・・にしてもこれは・・・。』

刀を取り鞘から引き抜く。

片方の刀はとても神々しい光を放っている。

もう片方が禍々しいオーラを放っている。

素振りをする。

『うん、久しぶりだ。だが、確認はできたしまあいいか。OFF』
そう呟くと二つの刀は光だし、今度はネックレスになった。それを首にかける。

『ああ・・・暇だ・・・。』

side 春樹

ん？あれ？確か意識飛ばすのに成功して・・・。
って、そういや俺続き聞いてねええええ！

「まあいいか。なんとかなるっしょ。」

「それはどうかな？」

なんか声が聞こえる。

「お前が我と契約するものか？」

「そうだ・・・といいなあ。」

後半は聞こえないように呟いた。

「ふむ、だが契約には手順がある。知っているのだろうか？」

「いや、全く。」

即答である。嘘をつくという選択肢は最初からなかったのである。

「・・・」

呆れた、とでも言わんばかりの表情である。

「まあ特別に説明してやろう。お前が契約するに相応しいか、試させてもらう。」

「で、俺は何をしたらいいんだ？」

「飲み込みはやつ！普通疑うかと思ったのだが・・・」

「いや、それはいいから、早くしろ。」

「う、うむ。お前にはこの魔物もどきと戦ってもらう。」

何もない空間から突然魔物（？）が現れた。

・・・なんとか、なりそうだ。

「倒せばいいのかー？」

「ああ、倒せるものなら、な。」

「その前にひとつ聞かせてくれ。」

「なんだ？」

「これ倒したら即契約って解釈でいいのか？」

また呆れたような視線。まあいいけど。

「これは第一段階だ。まだ何個か試練はある。」

春樹は、それを聞いて提案した。

「なあ、この魔物（？）ってどんくらいいるんだー？」

「ザッと500はいる。人型、動物型、昆虫型など色々混ざっているぞ。」

「ひとつ提案だが、これらを15分以内に倒した即契約してくれねえか？」

「ポカーン」な空気を感ずる。

「あっはっはっは。それはおもしろい！よかろう、15分間で倒せたら契約だ。」

「よしっ、言ったな？絶対だぞ。」

「ああ、言ったさ、それでは、スタート！」

現在戦闘中。

ちなみに戦闘と言っても、人型なら顔面を殴り、足を払い、腹を蹴っ飛ばし、腕を折る。それだけだ。

だが、投げた方が効率の良いことに気がつく。人型の足を払いそれを掴み投げるといふ戦法に切り替えた。

運がいいと、一匹投げて数十匹くらい減る。

(にしても、なんでこんなことができるんだろ・・・?)

それが、春樹の中に眠る能力の恩恵だと気がつくのはもう少し先のお話。

なんだかんだで、15分以内に倒し終えた春樹であった。

「あっはっは。まさか本当に15分で倒しきるとは思ってみなかった！」

「それじゃ契約の仕方を教えてくれ。」

「ああ、いいだろう。手順は簡単だ。」

1空間に手をかざす

2すると台が現れるのでそこに手をかざす。

これだけだそう。

そして契約は完了した。

(最後超あっけなかった・・・)

少し残念な春樹であった。

「……はっ!」

二人は同時に目を覚ます。

ちなみに大樹も春樹とほとんど同じことをやっていた。

ただ、大樹は指定した時間を30分にして、全部殴ったり蹴ったりである。

どうも「チビ」といわれたことのストレス発散も兼ねていたらしい。すぐくスッキリしていらっしやる。

『それじゃ、とりあえず武器になるように念じてみる。』

「……念じている」

すると、玉が光り始めて……。

俺の手元には1本の剣。

春樹の手はグローブが。

あ、野球のじゃなくて、手袋みたいな感じのね?

『ふむ……、武器の特性までは分からないからな、自分で探してくれ。』

「無責任だな。まあいいけど。」

『だが、お前らは武器を得た。後は使い方を学べばいい。』

なんだか疲れた。

だがまだ昼過ぎだ……。一眠りするか。

春樹も眠たそうだ……。

俺たちは気がついたら意識を手放し、夢の世界へと旅立っていた。

武器との契約って案外チョロいよね。 (後書き)

最後のほう、少し強引な気もありますが、まあ気にしないでください。
そろそろ攫われた夏希視点でも物語を書いていきたいと思う今日の
このごろ。

俺さ、思うんだ。俺らの目的の為に他人を巻き込んでいいのかなって・・・ま

と、いうわけで、やっと武器を使った戦闘を・・・書く下準備ができました

ちよっと、ゴウの正体明かしてからゴウの過去について外伝として書いてみようかなと思ってる。

俺さ、思うんだ。俺らの目的の為に他人を巻き込んでいいのかなって・・・まさ

sideメアリー

「お姉ちゃん遅いなあ。」

部屋でお姉ちゃんを待っている。

お姉ちゃんは「絶対宿を出てはいけない」と言っていた。

昨日は宿を出たけど、今日は出ない。

というわけで、私は暇なのです。

現在午後4時30分。

お姉ちゃんが出かけたのは午前6時頃。

誰もいないのに急に

「お姉ちゃんいないなあ」私心配だな」ちよつと探しに行ってもいいよねえ。」

と、言い訳をして、部屋を出て行く。

まあ、あまり知らない街に一人で出かけて迷子になるなんてよくあることだと思う。

私はとりあえず来た道を歩いている。

途中でお姉ちゃんらしき背中を見つける。

私は驚かせようと思ってお姉ちゃんの後を追った。

お姉ちゃんは裏道に入っていく。私は見失わないように追いかける。お姉ちゃんは裏道の奥のほうにある小屋に入っていく。

さすがに入るとマズいと思い、私は小屋の近くまで行き会話を聞こ

うとする。

だが、会話はうまく聞き取れない。ただ、ところどころ聞こえる。

「……………って言ったで……………!!」

「……………!!……………たは、……………を……………ない!」

怒鳴りあっています。お姉ちゃんがいつも私を叱るときとは違う声音です。

やがて、話し合いは終わり、お姉ちゃんが小屋から出てきました。

私は姿を見せるわけには行かず、小屋の裏に回って隠れました。

その裏手で私は見ちゃいました。死体を。

その死体は全部切り刻まれています。

私は叫びたくなる気持ちを抑え、その場から離れます。

お姉ちゃんの後をコッソリ追っているといきなり全身黒ずくめの人
が現れました。

お姉ちゃんは何やら怒鳴っています。黒ずくめはそんなお姉ちゃん
を切り刻みました。

私はその光景が頭から離れません。

思わず悲鳴をあげてしまいました。

黒ずくめはコチラを見ます。

目が合ってしまった。

私は訳も分からずその場から全速力で逃げ出しました。

男は追ってきます。でも、男は私に追いつきませんでした。

(……………やった、助かる!)

この時メアリーは気がついていませんでした。

自分の身体から魔力が発せられていることに。

俺はあくびをした。

よく寝たな。今何時だろう？

（午後5時27分だ。）

わかった、さて、喉渴いたし、水でも飲みに行くか……。部屋を出ようとするといきなり扉が開いた。

「た、助けてください！姉が……。姉が殺されたんです！……えっと？」

（とりあえず話を聞いただけ聞こう。）

俺は春樹を起こしてロビーへと向かった。

「ふむ、つまり通り魔（？）に殺されたわけか。」

事情を聞き終えた俺は、そう結論を出す。

「お願いです！私その現場を見ていたんです！」

春樹は……。寝てやがる。コイツこっちの世界来てからあんま役に立たない。

まあ、暇だし。夏希助けるっていつでも手がかりないし。

「で、俺たちはどうしたらいいんだ？」

「……………」

考えてないようだ。

（とりあえず、コイツの護衛でもしとけばいいだろ。）

「だが、俺たちはいつまでもこの街に留まるわけじゃない。」

「私も、元々は数日しか留まる予定はない、って姉から聞いてます。」

（一緒に旅したらどうだ？俺の勘だが、何かとんでもねえ能力を持

ってる気がする。」

能力？ふむ、まあ戦力として数えればいいのか？

（いや、秘めているだけでまだ使えるまでには至ってないと俺は推測する。）

だが、正直偶然であっただけの少女を信じるなんてこと・・・俺はできねえんだよな。

これが、アニメや漫画なら「俺が助けてやるよ。」とか言うんだろうけど。

俺は夏希を救出したら自分の居た世界へ戻るつもりである。

と、そんなことを考えていると、メアリーが不安そうな顔をしている。

「と、とりあえず考えさせてくれ。春樹寝てるし。俺の一存では決められない。」

「うん・・・わかった。」

そう言っただけ俺たちは解散した。

「と、いうことを話してたんだが、お前は覚えてるか？」
その夜、やっと目を覚ました春樹に事情を説明している。

「全く覚えてない。」

コイツ・・・まあいいか。

「んで、どうする？」

「んー、通り魔(?)は気になるが・・・んー。」

まあそうなるよなあ。俺もそんな感じだし。

だが、俺は思ったんだ。

暗殺者↓強い↓倒して仲間にする↓戦力増える。

ついでに、なんか情報持ってるって嬉しいな。

（ふむ・・・まあお前がそれでいいならいいさ。）

春樹はどう言うだろう・・・？

（だが、相手は殺しのプロだ。そこだけは忘れるな。）

「と、いうわけで、ちょっと仲間を増やしに行ってくる。」

「いや、どういうわけだよ！後、通り魔（？）を倒しに行くなら付き合うぜ。」

・・・ツチ。長年付き合っていると考える読まれやすくなるんだな・・・。

「まあいいか。んじゃ行くぞ。」

「つと、そのまえに・・・。ンッ。」

春樹はグローブを装着する。

俺は・・・さすがに、街中を剣持って歩くって・・・ねえ？まあ夜中だけどね！

「んじゃ、行くぞ。」

と、まあそんなこと言って宿を出て行こうとするところをメアリーに見られた。

まあとりあえず通り魔（？）を捕まえに行くということだけ伝えたと

「私も行かせてください！お願いします！」

ゴウ、いけると思うか？

（囀として使えるだろう。連れて行くか。）

「ったく、しょうがねえな。俺か春樹のそばから離れるなよ？いいな？」

「はい！」

というわけで、メアリーも加わって3人で通り魔（？）を捕らえに

行くことになった。

俺さ、思うんだ。俺らの目的の為に他人を巻き込んでいいのかなって・・・まま

俺思うんだ。春樹が空気となってる気がする。

なんとかしてえなあ・・・

俺少し調子のってたかもしれん・・・そう思った日（前書き）

案外なんとでもなると思った。

んー、だがやっぱ戦闘のことかもうちよつと上手になりたいなあ・

・

まあ他のところより、苦手ってだけで、他のところだって上手になりた
いけど。

後もうラブコメ要素入る気しねえ・・・

俺少し調子のってたかもしれん・・・そう思った日

夜ってあれだよ。涼しいよね。

そんなわけで、現在、通り魔(?)を探しているわけです。

あー、今更だけど俺は思うんだよ。

(ん?何を思うんだ?)

いや、よく小説とかで転生する話ってあるじゃんか。

(ああ、あるな。それがどうした?)

いや、どうせなら転生してチート能力でウハウハがよかったな、ってね。

(・・・転生と言ってもいいことばかりじゃねえぞ?)

まあ、そりゃそういう部分もあるかもしれないけどさ。

(まあ、転生とか抜きで異世界へ来てるんだ。んなこと嘆いたって遅いさ。)

と、そんなことをゴウと会話しつつ裏道を歩いている。

「そういえばさ、メアリーたちはなんでここを訪れたんだ?」

春樹・・・お前人の話はきちんと聞いとけよ・・・。

「いや、この間言ってたかった?」

だが、そんなことは言わずにそれとなく返す。

「・・・って、あれ?メアリーどこいった?」

周囲を見回す。・・・あれ?いないし・・・。

『まあ、こんな時間帯にこんなとこいたら狙われるよな、口封じ的な意味で。』

「ゴウ、お前気配探れたりできないのか?」

なんつー無茶振りだよつ。

『んー、できないこともなかったが、日本じゃそんなに使わなかったし。』

ええ!?!?できるのかよつ!

『よし、やってみるか。』

「おう！やってくれ！」

なんてことを裏道でしてる俺たちを傍から見たらどう思うんだろう？

『・・・んー、精度がガタ落ちしてる。』

「どれくらいわかってるんだ？」

『どの方角にいるかしかわからなかった・・・。スマンな。』

それがわかるだけでもスゲェよ！

『ここから、西だ。』

「わかった。んじゃ西に向かって進むか。」

というわけで西に向かって進んでいったのであった。

sideメアリー

とても気まずいです。

知り合って数日の方々にこんなこと頼むのってやっぱりおかしいのかな？

でも、頼れる人が他にいなかったし・・・。

にしてもこの沈黙は気まずいです。

大樹さんは考え事をしているようだし・・・。（※ゴウと話しているだけす。）

春樹さんってよく喋る人かなあって思ってたけどそうでもないのかなぁ・・・。

などと考えていると、急に身体が動かなくなりました。

そのことを伝えようとしたが口が動きません。

え、そんな・・・。二人は気づいてくれません・・・。

私の足場に急に穴ができました。私はその穴に落ちました。

結構本気で全力疾走しています。

春樹と同じくらい走れるというのは結構驚いた。

「だが、いつ連れ去られたんだ？」

「わからん、だがこれは俺達が全面的に悪い。」

角を曲がる。つぶね、今転びそうになった。

「ああ、だから絶対助けるぞ。」

おお、さすがはそれなりに正義感が強い春樹だ。だがその意見には賛成である。

「ああ、ゴウ、サポート・・・いや、もしかしたらお前に任せることになるかもしれないが、頼む。」

（ああ、任せとけ。）

どれくらい走っただろう。俺たちは怪しい小屋を見つけた。

『ここかもしれん。』

俺たちは小屋のほうへ向かう。

ああ、確かに話し声は聞こえる・・・。

「突撃するか？」と視線で春樹に聞いてみる。

「問題ない、いざとなったら実力行使だ。」

そう答えが返ってきた・・・気がするけど、だいたい合ってると思う。

俺は指で3，2，1とカウントする。

0と同時に拳を握る。春樹と同時に扉を殴り飛ばす。

部屋の中はまっくらだ。何も見えない。

ゴウ、何人いるかわかるか？

（だいたい、3，4人・・・あ、メアリーの気配っぽいのもあるぞ。

）
なんかラッキー。だが見えなければ対処のしようがないぞ。

「ガハッ・・・」

何が起きた・・・？この暗い中じゃ相手も何も見えないんじゃない？
（いや、違う、多分相手は<<暗視>>を持っている。）

暗視って何だよそれ！セケエ！

春樹もその場にうずくまっている。

クソッ・・・、俺たちはこんなところで終わるのかよ・・・。

あーあ、きつとこういうときアニメとかだとさ、都合よく能力に目覚めたり、助っ人が来たりするんだろうな。でも、この世界来て数日の俺らに知り合いなんてものがあるわけもなく・・・。

と、思ったら俺の身体は立ち上がった・・・、んなアホな。俺は何にも・・・あ、ゴウか。

『・・・。。。。。。』

ゴウは無言である・・・、ああ、ゴウ頼んだ。やっぱ俺たちだけじゃムリだった。

（ああ、任せな。夏希の情報が得られるかもだしな。）

その言葉を聞いて俺は安心した・・・。そしたら急に意識が遠のいていった。

俺はハルの元まで歩いていき、

『後は俺に任せろ。』

と、一言囁く。ハルはそれを聞いて頷き、意識を失った。

『さて・・・、お前ら何者だ？』

相手は無言である。

『お前らが何者か知らないが、ここで殺らせてもらうがな。』

俺は首飾りを取り外す。

相手は何かされるとわかって、コチラへ向かってきた。
ん？複数いるのか？まあいいがな。

『ON』

首飾りが光りだす。ふむ、4人か。

光が収まる。両手に1本ずつ刀が現れる。

とりあえず、刀を横に薙ぐ。

手応えはあった。1人・・・いや、2人は殺れた。

残りは2人か。

パァン。そんな音が聞こえる。ツチ、銃持ってる奴がいるのか。

『ふん、音が聞こえれば問題なんてねえよ！』

銃弾を刀身で弾く。そして音が聞こえたほうへ走る。

そのまま蹴っ飛ばす。ドンッ。壁にぶつかったっぽいな。

とりあえず刀を音がしたほうへ投げる。グチャ。ああ、確実に

殺れてるわ。

残り1人か。だが、攻撃を仕掛けてこない・・・。

気配を探る。ん？既に小屋の中にいないのか？待てよ・・・これは・

・

『メアリー、いるか？』

んーんーんー、と聞こえる。ああ、口にガムテープでも貼られてる
のか？

ハルとメアリーを抱えて俺は小屋の外へ出る。

外は小屋の中よりは明るかった。だが、これだけ明るければ問題な
い。

メアリーはロープに縛られている。刀でロープを切る。

ハルの方は・・・ああ、これくらいなら問題はないか。

にしても・・・二人抱えて宿まで戻るのか俺。あー、大樹起きてく
れないかな。

俺は二人を抱えて宿まで戻った。

俺少し調子のってたかもしれん・・・そう思った日（後書き）

んー、どうしたものか。

もうちょつとしたらキャラの容姿とか能力とかについてまとめたものをかきたいな。

俺らの旅に仲間が一人増えた日（前書き）

なんだろう・・・連続でこんな書いてネタ切れにならないか心配だ・
・

あ、元から切れるネタなんてなかったわ。

俺らの旅に仲間が一人増えた日

ああ・・・そういえば昨日・・・

ゴウ、どうなった？

（とりあえず、全員・・・倒した。情報は何もなかった。すまん。）

なんで謝るんだよ。お前がいなきゃ俺たち死んでたんだぞ？

・・・そういえば、俺なんかベッドの中に違和感を感じるんだが。

（ああ、メアリーの部屋が分からなかったから、とりあえず一緒にベッドに寝かせといた。）

・・・え？

（ああ、俺は当然横になってるだけで何もしてないぞ？）

ああ、それならよかった・・・って、とりあえず急いでベッドから出る。

春樹はまだ起きてない・・・、危ねえ・・・。

2人が起きるのを待ち起きてから朝飯を食べて部屋に戻ってきた。

「んで、どうする？」

春樹が尋ねてきた。

「んー、とりあえず、この街を出て、どこかに向かわないとだね。」
だが、ゴウが言うにはあれが通り魔（？）だったかは分からないって・・・。

メアリーをこの街に一人にするのは危険だが俺たちの旅も危険だと思うんだが・・・。

（とりあえず聞いてみるよ。）

だな。

「なあメアリー。もしよければ俺たちと旅をしないか？」

メアリーは突然のことで驚いている。

そりゃそうだよなあ・・・。

「だが、よく考えて欲しいんだ。俺たちについてくるからといって、安全が保証されるわけじゃないんだ。」

（まあ1日くらい考える時間がないと、こういうのって困るよな。）
俺と春樹は部屋を出た。

「で、春樹に確認するのは忘れてたがお前はメアリーがついてくることに賛成なのか？」

ロビーで俺と春樹は話し合いを始める。

「まあ・・・だがついてくるとして俺たちで守れるのか？」

そうなんだよなあ・・・。それが疑問だ。

「そういえばさ、＜＜暗視＞＞がどうか言ってなかった？」

ゴウにそう問いかける。

『ああ、そうだったな。こんなに早くに能力持ちと遭遇するとは思ってなかったんだ。』

「んで、その＜＜暗視＞＞ってなんだ？」

『いや、まんま、暗い中でも目が見えることだが？』
ですよーなー。

『ああ、ついでだし、説明しとくが、人間ってのはな、だいたい一人一つは能力を持ってるんだ。だがそれが覚醒することはそんなにないんだ。』

そんなにない？ってことはレアなのか？

『それはわからんが、あんなのが＜＜暗視＞＞を持ってたんだ。騎

士団とかは持つてる奴多そうだな。』

「そういうゴウは何か能力持つてるのか？」

ああ、それは気になるな。

『俺か？残念ながら俺にはないんだ。だがお前ら二人は多分覚醒するぞ。』

ほう・・・春樹が覚醒するのは頷けるが俺もか・・・。

『さて、そろそろ部屋に戻らないか？』

「そうするか。」

春樹が席をたつ。そのまま部屋へ向かう。俺もそれについていく。

「「ただいまー」」

メアリーは寝ていた。

ええ・・・普通悩んどるかじゃねえのか？

「・・・んー、あれ？私寝てました？」

「「ああ、寝てた。」」

「それで、どう？決まった？」

俺はメアリーに尋ねる。

「えっと、その・・・迷惑でなければ一緒に連れてって欲しいです。」

（へえ、俺は来ないって思ってたんだがな。）

「そうか。じゃあ俺たちが何を目的としているか話さなきゃだな。」

というわけで現在、異世界から来たこととかめんどいことを省き説明中。

それを聞いたメアリーは、

「はあ、なるほど。そういう事情があったんですか。」

「ああ、そうだ、まあ結構荒事もあるかもしれないが・・・」

「まあ、荒事は極力避けたいとこだよな。」

まあその通りだと思うがな。

「んじゃ、すぐこの街を出るぞ。」

「え？なんでだよ。せっかくだし色々見て回ろうぜ。」

俺は春樹に小声で

「バカ、通り魔(?)に仲間がいるかもしれないだろ、ここに居続けるのは危ないだろ。」

春樹は納得してくれた。

「んじゃ、何か持っていくものはあるか？」

「あ、少しだけ待っててください。」

そう言ってメアリーは部屋を出て行った。

数分後。かわいらしいリュックを背負ったメアリーが戻ってきた。

「準備できましたよ。それじゃあ行きましょう。」

なんだろう・・・見た目とあのリュックが・・・んー、なんともいえないけど・・・まあいいか。

「それじゃ行こうか。」

こうして、俺たちはメアリーを加えて旅を再開するのであった。

俺らの旅に仲間が一人増えた日（後書き）

んー、なんかちょっと強引だったけど・・・まあいいか。
本当・・・これ恋愛とかでてくるのか・・・？

俺がサバイバル経験をしている日（前書き）

ああ・・・少しづつなんとかしたいな。

とりあえず、今眠いです。 誤字脱字あるかもしれません。
あったら教えてください。

俺がサバイバル経験をしている日

そんなわけで、メアリーが旅に加わってから3週間ほど経った。何をしてたかと言えば・・・修行だ。

いやあ、すごい。3週間森でサバイバルしてたらすっかり慣れちゃいましたよ。

（まあ、彷徨ってるだけだけどな。）

彷徨ってないよ？

（仕方ない、お前に現実を認識させてやるよ。）

え？だから別に迷子になんて・・・

（迷いの森と呼ばれてる森に躊躇なく突撃したどこかの誰かさんが迷子になったんだよ。）

俺じゃない！春樹だ！

（だが、修行というのも事実。まあ身体のスペックは元々良かったし・・・ただ使ってたただけだぞお前は。）

まあ、メアリーも「自分の身くらい守りたい。」ということで軽くやってるけど。

「にしても・・・春樹お前すごいな。もう武器の使い方覚えたのかよ。」

「いや、武器も何も装着して今まで通りに動くだけなんだが？」と、俺たちは朝食を食いながら話してる。

ああ、そうだな、使ったことのない剣を使わされる俺って一体・・・だが、結構慣れてきた。よし、ここらでちょっとオリジナル必殺でも編み出すか。

（いや、難しいぞ？）

何、やってみせるさ。

「あ、おはようございます。」

メアリーが起きてきた。

野宿はマズいと思い、周りの木を切って、小屋を作ってみました。
まあ、釘の代わりは、近場に出没する魔物と牙を削ってだね。

「ああ、おはよう。」

春樹が挨拶を返す。

「ん、ああおはよう。よく眠れたか？」

「はい、眠れました。」

というわけで朝食を取る。朝食は何かって？

こちらへんで食えそうな魔物を狩ってだね。いい訓練になるよ。

「んじゃ、皆揃ったし・・・いったきまーす。」

春樹の掛け声に合わせて

「「いただきます」」

朝食は美味しかったです。

「んじゃ、今日もはじめるか。」

「ん、そうだな。ゴウ頼む。」

春樹がそう言う・・・

『分かった。んじやかかってこい。』

そう、ゴウが春樹の指導をしている。まあ、技術的な面では春樹は問題ないので何をするかといえば

「それっ！」

組み手である。

ちなみに今の春樹は武器の特殊効果（？）なるもので、身体能力が

数倍に跳ね上がった。

鬼に金棒だね・・・、いや春樹にグローブか。

ちなみにゴウは素手である。

「これでどうだっ！」

春樹の攻撃はさっきからかすりそうでかすらない。

ちなみにメアリーは現在何をしているかという・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

瞑想中である。

これには理由があるらしい。

なんでもメアリーは＜＜加速＞＞という能力を持ってて、感情が昂ぶったり、沈んだりしないと発動しないとかで。しかも発動してもそれほど効果が現れるわけでもないらしい。

まあ通り魔(?)からメアリーが逃げ切れた理由はこれ・・・らしいよ。

全部ゴウが言ってたけど。

んで、話を戻すが、それでメアリーは、自分の意思で発動できるようにするために精神を鍛えてるとか鍛えてないとかで。まあゴウは知ってそうだし、任せてるけど・・・今夜あたりに聞いてみよう。

昼前までゴウと春樹の組み手は続いた。その間暇である。まあそんなわけで真面目にオリジナル必殺を考えてみる。

(いや、やめとけて、そんな簡単にできねえぞ?)

む、なんかなあ・・・。絶対編み出してやるよ
というわけで考えてみる。

んー、武器は剣だし・・・・・・・・んー。

そんなことを考えてたら昼飯の時間になった。

昼飯の後は春樹は筋トレ兼魔物狩り。

俺は・・・まあ、俺のフリしたゴウがメアリーに<<加速>>について指導？

まあそこらへんはさっぱりだし、任せとく。

『いいか？お前はもう発動させること自体は可能なんだ。ただお前はなんらかの状況下じゃないと発動しない。それを、いつでも発動させることができるようにならないかならない。』

こんなことを1週間前に言っていた。

まあ、正直、修行内容に興味はないから、俺は考え事をしてる。

と、そんなことしていると夕方になる。

あ、ちなみに俺は修行といってもそれほどすることはない。

ゴウが俺の身体で暴れてるからな。それで身体だけは鍛えられる。

まあ俺が最初から大暴れできた理由もゴウが過去数回俺の身体で暴れてるから、それで身体が一気にパワーアップした感じ？

というわけで夕飯。

春樹の狩った魔物を調理した。いやあ、ゴウがこういうの知っててよかった。

でもなんで知ってるんだろう？それも聞かないとだね。

ああ、にしても美味しい。ああ、美味しい。

ちなみに俺は何をするかというところ、二人が寝静まった頃に脱出でき

そうなところを探している。

まあ今のところ成果はないけどな。

(まあ、お前が原因だし・・・頑張れよ！)

というわけで今夜も探しに行く。

「んー、にしてもここはマジでどこだよ。」

(いや、だから迷いの森だって。)

んー、でもなあ、地図で見るとそれほどかくなさそうだし・・・、絶対まっすぐいけば出られるはずだったんだ。

(いや、だから、それで抜けられないから迷いの森なんだろう。)

だな、もう無謀なことはいって誓った。

とりあえず、俺は剣を出す。

「ああ、ここらへんはだいたい春樹が狩り尽してるし・・・んー、そろそろ別のところに移動すべきか？」

まあ移動するにも小屋は必要だし・・・さて、せっかくだしもうちょい進んだところに作るか。

釘の代わりの牙はないから・・・まあそれは明日調達するとして、とりあえず木を伐採。

20分後。

うむ。だいたい部品はできた。後は春樹たちに説明して、こっち移動して組み立てるだけだ。

ちなみに似たようなことを2週間の間に3回やっている。

進んでいるはずなだけだなあ……。

(いや、本当……お前が悪い……。ん？これは……。)
え？何急にどうした。

(くるぞ。)

一言で把握した。

剣を構える。どうも色々な形に変わるらしい。

まあ、今のところサイズを少し変更できる程度だが。

ゴウが言うには、剣の種類も変更できるようになるらしい。

いやあ、本当……都合がいいよね！

というわけで、魔物が襲ってきました。

とりあえず考えた必殺技をやってみる。

「いくぜっ！必殺！超乱れ斬り！」

(……。お前それはないだろう……。)

考えたのに！ひでえ……。

まあやってることは上段・中段・下段と順番に切りつけてるだけだが。

(お前も能力はあるはずだから……。とりあえずそれが覚醒するまで待とうな？)

とりあえず普通に斬りつける。

ん、楽勝だった。

さて、楽勝だったし、俺も戻って寝るか。

『本当……。いつまでここにいる気なんだろ……。なんか普通に住める気がするなあ……。』

なんてことを呟きつつゴウは刀を出す。

『ON』

軽く薙ぐ。

『んー、やっぱり弱くなってる気がするな。だが、やっと身体が追いついてきてるんだ。』

そんなことを考えながらゴウは刀を地面に刺す。

ああ、とりあえず・・・早く森抜け出さないと・・・

コイツラ・・・もう当初の目的を見失っている。

俺は刀に力を込める。

何かを刺した・・・よし、1個消したか。

そういつて刀をしまう。

『OFF』

さて、そろそろ寝るか・・・。

俺は寢床へもどっていった。

俺がサバイバル経験をしている日（後書き）

よっし、やり遂げた・・・もう何書いたかあんまり覚えてないけど・
・

とりあえず寝る。

キャラの容姿『だけ』について書いてみた。(前書き)

はい、タイトル通り。ちょっと前に書いた気もしますが、キャラの容姿の描写を忘れていたのでここに書いておこうかな、と

キャラの容姿『だけ』について書いてみた。

井沢大樹

身長 157 cm

体重 51 kg

年齢 16歳

まあ、日本人だし、黒い髪で、黒い目。

ゴウが武器を出したり能力を使ったりすると若干髪の色が変わったりするけど、まだ気づいていない。

黒川春樹

身長 172 cm

体重 68 kg

年齢 16歳

まあ、日本人だし、黒い髪で、黒い目

筋肉が結構ついてる。色々格闘技をやっているが主にボクシングとか空手が主体である。

赤井夏希

身長 166 cm

体重 60 kg

年齢 16歳

茶髪で、黒い目である。茶髪なのは染めたとかではなく生まれつき。髪型はポニーテールだったり、そうじゃなかったり。

発育は良好です。スリーサイズは・・・うん、きっとそのうち作中で書くと信じていてください。

メアリ

身長 162 cm

体重 56 kg

年齢 15 歳

茶髪で琥珀色の目。髪は肩の辺りまで伸ばしている。

スリーサイズは省略。 まあ作中で出す予定だし・・・うん。そういうことです。

キャラの容姿『だけ』について書いてみた。(後書き)

よし、なんとか書き上げた。

スリーサイズ考えるのがめんどかったので後回し・・・とかしてないからね？

というわけで今後はきちんと容姿についての描写を作中でしていきますと思います。

一旦日本に戻ることにした。**(前書き)**

今回は久しぶりに日本です。

一旦日本に戻ることにした。

そんなこんなでサバイバルな生活をして、修行をしていたらまあ少しは強くなった・・・はず。

うん、住めば都という言葉の意味を実感させられたな。とか思ってるある日のこと。

「そういえば俺この世界に行く準備したけど、急なことで結局持ってきてないな。」

などと春樹さんがおっしゃるわけですよ。

「準備？何を準備したんだ？」

などと俺は聞き返すわけですよ。

「え？そりゃあ、食料か娯楽とか竹刀とか色々。」

俺は食料という単語に反応してしまった。

「え？食料？やっぱカップメンとか？」

「え？ああ、そんな感じだが・・・？」

「よし、戻ろう。確かゴウがなんとか言っていたよな？」

というわけで出番だゴウ。

『ああ、なんとかなるぞ。まあちよつと時間があるが。』

何分くらい？

『30〜50だ。』

よし、その間寝てるんで、後は任せた。

「えっと、メアリーはどうする？」

『とりあえず事情を説明して一緒に来てもら・・・いたいけどムリだ。』

「じゃあどうする？」

『ふむ・・・まあ、1時間フラリとしてくる と伝えておいてくれ。』

「わかった。」

というわけで春樹はメアリーを説得中。

その間ゴウは一人で魔方陣を描いている。

『ん・・・こうだったかな・・・ああ、こうだったな。』

とか30分くらいやってる内に魔方陣が完成し、この世界へ来たときのゲートが現れた。

『ハルー、できたぞ。』

「んー、わかった。今行く。」

ということがあり、俺たちは元の世界へ戻る。

なんてことがあったのか。

というか俺はどうして春樹にさんづけしてるんだ？

（いや、回想だからじゃないの？）

だよなあ・・・。

というわけで現在、井沢家のマイルームで漫画を読んでいます。

ちなみに日付は俺らが異世界へ行ってから30分前後しか経っていませんでした。

（まあ、俺の能力だとしても考えといてくれ。）

わかった。

春樹は自分の家へ荷物を取りに行った。

俺も何か持っていくか・・・。

というわけが必要になりそうなるものを脳内で思い浮かべてみる。

ゲーム・音楽プレイヤー・漫画・携帯・カップメン・お菓子 くらいか？

（いや、どれもあっちじゃ意味ないからね？）

まあとりあえず音楽プレイヤーと、カップメンとお菓子を持ってくるか。

お菓子をメアリーにあげよう。喜ぶかな？

（さあ？でも喜びはすると思うぞ。口に合うかは別だが。）

よし。とりあえず俺も・・・あ、お湯がいるなあ・・・なんとかなるか？

（まあ、なんとかなるさ。）

久しぶりだしコンビニでも行くか・・・。

俺は戸締りをして、コンビニへ向かった。

（この時間帯だし、人はそういないだろう。）

というわけで最寄のコンビニへついた。

「いっらしやいませー。」

チャラけた20台前半みたいなおっさ・・・いやお兄さんか？が、レジにいる。

ふむ、まあとりあえずなんか買うか。

（ふむ・・・最近こっちのものあんまし食ってないから弁当買おうぜ。）

そだな。んー、どれにしよう？

鮭弁当 焼肉弁当 唐揚げ弁当 厳選されたのりを使用！と書かれたのり弁当。

（んー、微妙だな。まあどれか1個選ぶが・・・ああ、メアリーに

おにぎりでも買ってたら？
そうだな。

鮭 梅 しぐれ 昆布 ツナマヨ 明太子
というわけで、手巻き寿司のほうも見ていく。

納豆 ツナ マグロ

え・・・何故この3種類・・・。麺類の類も見ていくか。

きしめん そば 冷やし中華 うどん
まあ、こんなもんだよな。

ゴウ、どれにする？

（んー、とりあえず俺は焼肉弁当とツナマヨ3個。）

じゃあ俺は唐揚げ弁当に鮭2個で。

まあサバイバル生活だし・・・食料は日持ちするほうがいいな。とな
るとやっぱ、カップメンだな。

というわけで俺はカップメンを大量に買う。
レジに持っていく。

「合計で3400円になります。」

俺は諭吉を出す。だって、諭吉しかなかったんだもん！

すると店員が一瞬ニヤリとした・・・気がした。

袋につめてもらい、後はおつりを貰うだけ。

「はい、おつりでーす。」

渡されたの野口が一枚。

「えっと・・・冗談ですよ？」

「ああ？んだよ？文句あんのか！」

「ありまくりに決まってるだろ！！！」

相手の柄が急に悪くなったりすると困るよね。

「あ？お前調子こいてんじゃないぞ？」

「え？だっておつりが足りないからクレーム言ってるだけですよ？」
「うっせえよ！残りは俺のモンだよ！文句あんのか！」

とかいうやりとりをしているとコンビニに柄の悪そうなのがゾロゾロ入ってきた。

そのうちの一人・・・あ、いまだき珍しくモヒカンの奴が

「ソイツつか？前田さんに調子こいてるガキってのは？」

「ああ、そうなんだよ。俺おつりきちんと返したのにいちゃもんつけてくんだよ。」

というかモヒカンで現代社会を生きていくのか・・・コイツすごいな。

（ああ、俺もそう思う。恥ずかしくないのか？）

春樹を・・・呼ぶか？んー、だがな・・・。

とか考えている間にもモヒカンたちは盛り上がって気がついたら

「で？これでも文句あんのか？」

いきなりすぎる・・・。

「いや、だから返してくださいよ。店員でしょ？というかこんなことばっかやってるんですか？」

するとモヒカンたちが笑い出す。

「はっははははは、そりゃそうよ。こんな楽に金が稼げるなら誰だってやるだろ。なあ？」

と、モヒカンが他の柄の悪いやつらに聞く

「やるに決まってるんだろ。」「てかさっさと出てけよ。」「何？文句あんの？」

などとまた勝手に盛り上がっている。

するとレジの奴が・・・

「ったくよお、まだわかんねえの？お前みたいなチビは俺らの言うこと従ってりゃいいの？」

あっはっはっは、一斉に笑い出す不良たち。

俺も笑い出す。すると

「あ？何？何笑っちゃってんの？あんま調子ノってんと潰すぞクソ

チ」

言葉が途切れたのは俺がそいつを気絶させたからである。

・・・ゴウ。2分で始末できると思う？

（ああ、余裕だ。）

いきなり仲間を気絶させられ不良どもは思い思いのことを言いながら殴りかかってくる。

「うっせえええ！誰がチビじゃああああ！！！」

俺は手前にいたモヒカン野朗の股間に蹴りをいれる。
モヒカンは気絶する。

「て、てめえ・・・調子こいてんじゃねええよ！！！」

「お前さ、調子こいてんじゃねえとしか言えないのかよ？あ？」
腹に拳を放つ。

「ぐえっ・・・げほげほげほ。」

げ、ゲロはきやがった。

それを見た他の連中は・・・、青ざめてるのが半分。逆上してるのが半分。

ゴウ？やるか？

（殺らせてもらう。）

あ、殺すなよ。最近異世界で魔物ばっか狩ってたんで、感覚がちよっとズレてるかも。

『うおらあああ！うっせんだよ！お前らぶっ殺すぞ！！！！』

あ、バカ。深夜のコンビニでなんてことを叫ぶんだよ！気持ちちは分かるけど。

バキッ。バキッ。

そんな音がする。あ、骨折させてる・・・。

マズい、逃げるぞ。・・・いや、その前に脅しかけとけ。あ、でも

コンビニの監視カメラ・・・

『おい？監視カメラは起動してるのか？』

俺はレジのやつに聞く。

「い、いいえ。このコンビニはありません。」

そりゃそうだ・・・じゃなきゃこんなことできねえし。

『いいか？これは全部お前らの責任だ。コイツらが急に喧嘩をして、それでこうなった？』

「は、はい・・・」

『これは全部お前らの責任だ。俺は何も関わっていない。ただコンビニで買い物をしたただけだ？』
めっちゃ睨んでます。

『いいか？もしこのことを他言したら・・・地獄を見せるぞ？』

「ひいひい・・・」

『返事は？』

「は、はい」

『というわけだ、てめえらも・・・他言したらどうなるか分かってんだろうな？』

「あ？お前こそ通報されねえと思ってんのかよ！ああっ？」

・・・アホがいるぞ。

ゴウはソイツに近づく。鳩尾にこ拳を叩き込む。ついでに骨をへし折る。

『こうなりたいなら言えはいいだろ？あ？ただし言ったらお前ら全員これよりひどい目あわせんぞ！』

・・・、まあいつものことだが今回はやりすぎてる気がする。

『こうなりたい奴は前でろや！』

全員沈黙である。そりゃそうだ。

『よし、言わないって誓えるか？』

コクコク。全員頷いている。

『今日会ったのは全部テメェらの喧嘩だ、そうだろ？』

「」「」「はい！その通りです！」「」「」「」

いやあ、現実でこんなことってあるんだな。

それに満足したのか帰ろうとするゴウ。

あ、待てよ！おつり！

『ああ・・・おい、おつり出せ。』

と、睨んで言ってみる。

「はい！お持ちします。なのでどうか許してください！」
そういつて足りない分を持ってきた。

なんかスツキリしないが帰るか。

・・・結局全員鳩尾に拳を放ってから帰ったとかは言えないな・・・。

というわけで、春樹が俺の部屋へ戻ってきた。俺も準備はできている。

『さて、準備はできたか？』

「問題ない。」

『よし、行くぞ。』

こうして俺たちは元の世界へ戻っていった。

一旦日本に戻ることにした。(後書き)

というわけで今回はちょっとコンビニでもあれがめんどくさかった。
まあ途中でちよつと意味不だったりするかもしれないけどそれは・

・

とりあえず2日後くらいに読み返して変だなって思ったら少し削つてみたり足してみたりしようかな

メアリー救出作戦・・・を開始する。(前書き)

まあサブタイ通りです。

メアリー救出作戦・・・を開始する。

すげえ。俺らが日本に戻ってから時間がほとんど経ってない。

「メアリー、戻ったよー。お土産持って来たよー。」

あれ？いないのかな？

「おい、小屋の中にいないぞ。」

「近くにいるかな？手分けして探してみるか。」

というわけで俺は春樹とは反対側の森の中を探している。

んー、見つからない。

というわけで久しぶりにレモン飴を舐めております。

てかゴウ、お前気配探れたりできるんなら探ってみてくれよ。

（いや、この森じゃ気配を感知とかそういったことは・・・なんか妨害されてるんだが。）

ええ・・・。んー、あれか？妨害電波でも発してるのか？

（まあそういった類の力が働いてるのは確かだ。）

一回春樹と合流するか。

「春樹、見つかった？」

「いや、見当たらなかった、そっちは？」

「いなかった。」

俺が小屋についた10分くらい後に春樹は戻ってきた。とりあえずさっきゴウと話してたことを話しておくか。

説明中

「んー、となるとその元をなんとかしたらいいんじゃないの？」

現在小屋の中でカップメンを食べております。

「それができたら苦労はしないがな。」

そうだな、と春樹は呟く。

「いざとなったらメアリーは<加速>で逃げてくるんじゃない？」

『その可能性は否定できないが、発動できるかどうか・・・』

・・・。てか本当、数分しか離れてなかったのにどうしてこうなった。

監視でもされてるのか？

ん・・・？監視？

「それだっ！」

いきなり叫ぶ俺にビクリしている春樹。

「いきなりどうした。とりあえず落ち着け。」

そう言って紙コップに春樹が持ってきた緑茶を注いで渡してくる。

「ん、・・・ああ、うめえ。・・・じゃねえよ！監視だよ！」

再度叫ぶ俺に春樹は・・・

「いや、いきなりどうした。分かるように説明してくれ。」

（ああ、本当どうした。）

「いやね、考えてみるよ？俺らは実質数分しかこの場所を離れてないわけだ。」

なのにその数分の間にメアリーを攫っていくってことは監視されてたんだよ！」

春樹は「ポカーン」としている。

『要するに、数分の間に攫って撤退できたってことは常に俺らがいないかどうか見てたんじゃねえかってことだろ？それで俺らが離れたからそこを狙ったわけだ。だが、ここは迷いの森だ。迷い云々を抜いたとしてもでかい森だ。そう遠くにはいない。明日朝一で救助に行くか？』

・・・言いたかったのに。

「ああ、理解できた。」

だが、どうして今すぐじゃないんだ？こうしてる間にも離れていくかもしれないだろ？」

ごもつともで。

『今から探しに出ると中途半端になりそうだからだ。どうせなら明日一気にケリつけようぜ。』

というゴウの言葉を聞いて「なるほど」と思った。

というわけで色々持ってきたものを見せ合ったりしてる。

とりあえずカップメンとかジュースとかお菓子とかばっかです。

メアリーにも食わせてやりてえな。

あつという間に夜です。

「寝るか。」

「だな。」

俺たちは寝る準備を始めた。

「んじゃ、おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

夢の世界へ旅立つのは楽だった。

『ふむ、言った手前場所くらい把握しときたいものだな。』

夜中。ゴウは小屋の外へ出て森のほうへ歩いていく。

『ここらへんならいいか。』

手を空に向ける。

『索敵^{サーチ}』

やはり妨害されるか。

妨害されたことを確認した俺は地面に魔方陣を描く。

まあ描くと言ってもチョークも何もないから地面の土を指で……
つと、説明中に完成しちまった。

『サーチ索敵』

ブワァン……

魔方陣からそんな音が響く。魔方陣が紅く光りだす。

『よし、把握した。』

造作もないな、と呟き能力を解除する。

久しぶりに能力を使ったな……、思った以上に疲れた……、攻撃系は自重しとくか。

俺は魔方陣を消し、土を踏み、小屋へ戻っていく。

朝。

『なんか昨日の夜お前らが寝た後に煙が上がってたんでそっちまで見に行ったらあったぞ。』

と、起きたらそんなことを言うゴウ。

「なんで起こしてくれなかったんだよ！」

その通りだ。

『起こしたぞ？だがお前ら起きなかったし。それにあいつら酒飲んでたっぽいから、下手に出てメアリーに危害が加えられるよりは興奮が収まりかけてる今頃に叩きに行くのがベストだと思ったからな。』

カップメンを食べながらそんなことを話すゴウ。

ああうめえ。うめえよ、醤油ラーメン！

「ふむ、じゃあ朝飯食い終えたら行くか。」

『ああ、一応昼飯になるようなものは持ってけよ。メアリーにお菓子食べさせるんじゃないのか?』

「ああ、そうだな。」

俺は小さい箱に入ってるお菓子をポッケにいれる。

さて、どれほど動けるようになったか試すいい機会だ・・・俺何もやってないけどね!

メアリー救出作戦・・・を開始する。(後書き)

んー、なんかゴウをチートキャラにしすぎた気がする。
感想とか待ってます。

ちょっとはマシになってるのかな（前書き）

これ書いてるときとても重かったです（p cが）
てか1日1話を決意していたあの頃の俺はどこへいったんだろ

ちょっとはマシになってるのかな

現在、メアリーを攫ったと思われる一味の隠れている小屋っぽいところを観察中です。

救助というかきつと戦闘はあるわけで……。勝てるのか？

（まあいざとなったら助けるが俺に頼ってばっかじゃお前らの為にもならねえし、今回は頑張れ。）

だよなあ……。

「よし、とりあえず小屋に突撃するか。」

「いや、無謀すぎるからね？」

春樹はなんだかんだで強くなってると思う。

問題は俺である。筋力とか身体のスペックは上がったが俺のセンスはそのまんまである。

「ゴウ、だいたい何人くらいいるかわかるか？」

『いや、それが見たときより少ない。どういうことだ？』

知らん。

「だが減ってるってことは倒せる可能性が高くなるんじゃないか？」

『どうだろうな、相手の強さ次第だろう。』

その通りです。

『まあそんな話ばっかしてても始まらない。行ってこい。』

「わかった。んじゃ大樹行くぞ。」

了解、と呟き小屋へ向かって走る。

バン！

扉を蹴っ飛ばす。

「メアリーを取り返しにきた。どこにいるか教えてもらおう。」
メアリーは室内にはいなかった。

「ふんっ、教えるわけないだろう？」

黒いローブを身に纏った（声から察するに）男が椅子から立ち上がる。

人数は7人か。

「ロイさん、こいつらどうします？」

別の（声から察するに）男が黒いローブの男へ問いかける。
なるほど、ロイという名前か。

「始末しろ。」

こいつはリーダー的なポジションなのか？参戦するつもりはないというのか？

「俺は先に向かっていく。例の場所で待っている。」

ロイの姿が消えていく。

「というわけだから、お前らにはここで始末されてもらうぞ。」

「「俺たちもただで殺られる気はねえよ！」」

「っは、ほざいてろ。」

言葉と同時に男は刀（あれは多分シミターだ）を手を持つ。

それが戦闘の合図だった。

他の連中も各々の得物を手に持つ。

俺は剣を出す。春樹はグローブを装着する。

俺は小屋から出る。

それを追ってくるのは3人。

森の中まで走る。

そして近くにあった木の陰に隠れる。

「どこへいきやがった!」

3人の内の一人がそう叫ぶ。

ふむ、デブだなあいつ……。得物は斧か……。

他の二人は普通の体型である。

得物は二人とも斧である。何こいつら、斧ばっかじゃねえか!

「そっちがその気ならこっちからいかせてもらおう!」

男たちは手近な木々を斧で切り倒していく。

ツチ、見つかるのも時間の問題だな。

木が倒れるときに響く音が足音を消してくれることを祈ってもう少し奥へ進む。

どうやら気がついていないようだ……。だがこっちの方へ木々を切り倒しながら進んでくる。

にしても一発で木を切り倒すとか……。どんだけ腕力あるんだよ。

(いや、腕力だけじゃない。斧の使い方も上手い……。強敵だぞ。)

俺の剣は一発で折れそうだな。

ならば隙を突いて人間を攻撃するしかない!

……。だが、どうしようか。

ああ、クソ!こんなときアニメとかだと魔法とか超能力とかそう言った能力に覚醒するもんだろ!

やっぱそんなことにはならないよなあ……。

まずは木の上に登るか。

俺は気づかれないように木を登る。

「どこいきやがった!出て来いや!」

あの3人を分断することはできないか……?

いや、待てよ?こっから剣を投げて相手に当てることができれば……。

(厳しいぞ。どうせやるなら、こっから敵めがけて落下して脳天に剣を刺せ。)

いや、失敗したら俺怪我するからさ!

ズバン！

俺がいる木を切るつもりか……。こうなったらやるしかねえ！

「おらあっ！」

木が切り倒される。その瞬間俺は自分がある枝を蹴り跳躍する。

ズドン！

木が倒れて轟音が響く。

まだ俺には気がついていない……。って、気がついてないぞマジで！
……。これならいける！

男の内の一人……。ちょうど俺の真下にいる男が俺に気がつく。

だが遅い！

剣を脳に突き刺す！

喉のあたりから剣の先が出てくる。血が噴き出す。

うわぁ、血って噴き出すのか……。普通ありえなくね？まあいい。

「てめえよくもおおおお！」

仲間が同時に俺に攻撃を仕掛ける。

俺めがけて斧が振り下ろされる。俺は右側にいる男に体当たりを

する。

バランスを崩した男はそのまま倒れる。左側の男の斧は外れた。

起き上がらせる暇なんて与えねえよ！ 心臓に剣を刺す。

同時にもう一人の男がまた斧を振り下ろす。

「何度も振り下ろせばあたるとか思ってたのか？」

俺はその場から飛び退く。

すると男は斧を俺めがけて投げる。無理だ……。避けれない！

パン！

そんな音が鳴り響く。

あれ？俺生きてる？

『つたく、テメェ……。いい度胸してんじゃねえか！』

ゴウが何かやってくれたらしい。

（何かも何も剣で斧の軌道を逸らしたただだ。）

助かる。

（何、お前が死ぬと俺も消えるからな。）

『っと、ほらよっ!』

剣を男目掛けて投げつける。

相手は斧を投げて丸腰である。

ゴウの狙い通り剣を相手の胸に突き刺さる。

グサッ。

そんな感じだった。

男はその場に倒れる。

剣を回収してゴウは戻っていく。

「春樹の方へ急ぐか。」

にしてもすごい光景だ。

なんせ、俺が走ってきたあたりはほとんど木が倒れている。

（環境破壊もいいところだ。）

本当だよ！

「春樹!」

「お、大樹無事か?」

「ああ、無事だ。そっちは?」

「なんとかあったぞ。」

とりあえずその場に座る。

「あー、疲れたー、てかお前よく3人倒せたな。」

俺は頭をかく。

「俺は最後やばかった時にゴウが助けてくれたんだがさ。」

春樹も腰を下ろす。

「ああ、なんかこいつらの・・・えっと、シミター?を殴ったら折れたんだよ。」

すごっ。

「んで、それに気をとられている内に一人気絶させて残りも同じ感じだった。」

「ふーん、硬いんだなそのグローブ。」

「ああ、俺もそう思う。てか、得物のないこいつらって弱いんじゃない？」

「だよなあ、武器に頼りすぎてるというか・・・」
などと話し始める。

・・・

「てかメアリーはどこなんだ？」

春樹が問いかける。

「しまった、俺は殺しちまったんだが・・・こいつら生きてるか？」

「ああ、腹殴っただけだぞ。生きてるはずだ。」

俺は呼吸をしているか確かめる。

「春樹・・・3人とも呼吸してないぞ？」

「え・・・」

（そりゃシミターを折るような拳を腹に喰らってんだ。死んでもおかしくない。）
ですよねー。

「と、とりあえず小屋の中を調べてみようぜ。」

春樹はそう言う和小屋の中へ入っていく。

俺も後に続いた。

「・・・はあ。何もないな。」

思わずため息が出てしまう。

まだ調べている最中だが何も出てこない。

「あー、クソッ。んで何もねえんだよ！」

地団駄を踏む春樹。

ゴトン。

そんな音が鳴る。春樹の足元から。

「なんだこれ・・・？って、大樹！何やってんだよ！」

「いや、板をどかしたら階段があつたので降りていこうとしている。」

「

まあ、言葉通りのことをやってるわけで。

「まあいいか。行ってみようぜ。」

地下へと続く階段を下っていく。

そこにあつたのは紫色に光るゲート。

「ふう・・・。つまりこれを通っていったわけか。」

よく考えたらロイが消えた時の位置も春樹が地団駄踏んだあたりだった、

まあそれでも説明できない部分はあるけど。

「なるほどなあ・・・。」

感心してる場合じゃないよ春樹。

「どうする？まあ行くに決まってるけど。」

「じゃあ聞くなよ！」

春樹よ、心に余裕を持つことは大事なんだぞ？

「んじゃ、行くぞ！」

俺たちはその光の中へ入っていった。

ちょっとはマシになってるのかな（後書き）

なんとか書けた・・・よかったあ・・・

戦闘シーンを書くのはとても難しい・・・

あー、もっと上手になりたいなあ

おかしなところなどありましたら指摘してください。
直していけると・・・いいなあ

光の向こう。それと水の精霊（前書き）

目指せ1日1話更新

誤字とか脱字とかあったら、教えてください。

光の向こう。それと水の精霊

光を抜けた先には・・・
なんかいる。

これは異世界をつなぐゲートじゃなくて、世界の間を行き来するゲートか。

つまり「例の場所」とやらは、このゲートの先・・・つまりここであつてな。

理由？そりゃあ・・・メアリーを見つけたからに決まっているだろう？

現在の状況。

森の内部。

俺と春樹は少し離れたところにある木の陰に隠れている。

俺たちの視線の先にはロイと言う男とその仲間と思われる男たちがなにやら話し込んでいる。

メアリーは、その男たちと少し離れたところにロープで縛られ、口も塞がれた状態で転がっている。

そして大きな湖がある。

「どうする？」

春樹は拳を握る。

「俺たちで勝てるのか・・・？ロイという男は間違いなく俺たちより強い。」

その通りだ。

（だがあつちはまだ俺たちがいることに気がついてはいないぞ。）
と、すると・・・。

「いや、待てよ・・・、元々メアリーを助けに来ただけなんだ。全員倒す必要もなくね？」

「だが、あの人数から逃げ切れるか？」
んー・・・

『ならまずは誰か一人を確実に一撃ずつで仕留める。それで相手の気を引いて、その間にメアリーを救助だ。その後湖に飛び込め。あの湖は見覚えがあつてな・・・なんとかなるかもしれない。』

「まあ元々案なんてないし、それで行くか！・・・んじゃ気を引くのはお前に任せるぞ大樹。」

・・・え？まあゴウもいるしなんとかなるか・・・？

（何度も言うようだが死ぬ直前くらいになるまで俺は何もしないからな。）

わかってるよ。

木の間を駆け抜ける。

剣を既に手にある。

・・・どこまでできるかわからねえがやってやるさ。せつかくこの世界でできた知り合いだ。

まあ・・・それなりに可愛いし・・・とかはさておき、助ける。

なにせメアリーのお姉さんには大きな恩がある。今は既に死んでいるがそれでも何か恩返しができるとするならメアリーの安全を保障することぐらいだと俺は思っている。

「うおらあああ！」

俺の急な出現に相手は驚いている。

だがそれなら確実に一人は仕留められる！

一番前にいた男の胸に剣を刺す。

よし、仕留めた。だがこんな手は一度しか通用しない。

と、なると後は春樹がメアリーの縄を解きメアリーと共に湖に飛び込むまでの時間が稼げればいい。

春樹はまだ森の中だ。なんせロイは春樹のことも知ってるからな。

「おやあ？もう一人の少年はどうしたんだい？」

ほらね！

「知るか！アイツが遅いから俺は一人で来たんだよっ！文句あるか？」

ロイはそれを聞いて爆笑した。

「あっはっはっはっはっは。まさかあの6人を・・・いや、もう一人の少年がいけないということは、彼は囹にされているのか・・・？それとも死んだか？・・・まあいい、だがここにいる者は皆あいつらより強い。さて、君一人で何ができるかな？」

・・・話長いよ！

「あ？お前ら倒すに決まってるだろ？」

そう、こうやってメアリーから意識を逸らせていけばいい。

「だいたいお前らみたいな人類の底辺どもに負けるような俺じゃない。」

ただの子供にこんなこと言われたら普通は・・・

「ほう、言いますね。だがあの程度の者を退けたからといって調子に乗るとは愚かな・・・。」

ツム、案外キレない。だが確実に意識は逸らせている。

「っは、あんなのチョロいっての。お前らあんなのより強いっていうけど、あれより少し強い程度なら余裕だな。」

他の連中は少し殺気が立っている。ロイは未だに笑っている。

だがこれくらいなら十分だと俺は思う。

俺は剣を空に投げる。

それに気をとられた男の股間を蹴る。

男は気絶した。

剣が落ちてくる。俺はその場で跳躍して、剣を取る。空中から刀を振り下ろす。

だが、男はシミターで受け止める。

「おやあ？あれだけ言っておいてこの程度ですか？」

この程度も何も一回受け止められただけだろ！

後ろから攻撃が来る。

俺はその場でまた跳躍する。

後ろにいる別の男がシミターを横に振っていた。

・・・いい感じだ。

「てめえら一対多とか恥ずかしくないのかあああああああああ
あ！」

俺の視界に動くものを捉える。春樹頼んだぞ！

俺は着地と同時に近くににいる男の足を払う。

体勢を崩した男を剣で切断する。

「ほう。やりますね。」

ロイはそう呟く。だが何も行動をしない。

何故だ？

と、縄を解き湖に向かう二人を俺は視界に捉える。

俺もそちらへ合流しようと駆け出す。

そして春樹とメアリーの存在に気がつく。

「なるほど、これが狙いでしたか。大方剣を投げたのか、先程の叫び声が合図だったのでしょうか。」

いや、両方です。

「残念だったな！お前らの負けだ！諦めな！」

するとそこでロイがはじめて行動を起こす。

アクアカッター

「水の刃」

ロイが技名を発すると湖から水の刃が飛んでくる。

「湖の抜け道を使おうとしているようですけど、湖から攻撃されちゃあいけませんねえ？」

ロイはニヤニヤしながらさういう。いやらしい顔だな。

「さて、どうするんですか？」

本当だよ！どうするんだよゴウ！

（いや、これは予想外だった。水を操るとなると水属性・・・いや、水系能力者という表現か。）

んなこたぁいいんだよ！何か方法はないのかよ！

『嬢ちゃん、＜＜加速＞＞は使えるか？』

メアリーは突然の問いかけに驚くがすぐ答える。

「わかりません・・・でもやってみます！」

おお頼もしい！

「メアリー、成功させてくれよ？」

『いいかメアリー。お前は既に使える状態なんだ、ただ不安定なだけだ。自分を信じるんだ。』

それっぽい助言だ。

「はい！」

そんなやりとりをしている間にも水の刃は飛んでくるわけで。今はゴウが身体を使っているため水の刃は春樹に任せている。

「＜＜加速＞＞」

ブワン・・・

そんな音がする。俺の目の前に水の刃が止まっている。

いや、若干動いている・・・ということは成功か！

「できました大樹さん！」

「よし、なら後は湖に飛び込むだけだ、後はゴ・・・この俺に任せおけ！」

「わかりました。」

「春樹、先に飛び込め！」

俺は水の刃の対処のために俺たちより少し前にいる春樹にそう伝える。

・・・あれ？あいつも止まってる？

（どうも成功したはいいが範囲がだいぶせまいようだ。・・・いや、初めてで他人を巻き込めるということを考えると将来有望かな？とりあえず春樹を掴まろ。）
了解。

俺は春樹の腕を掴む。きつとこれ春樹にしたらすごい体験だろうな。まあいいか。そして春樹を湖に投げ飛ばす。

「メアリー俺たちも続くぞ！」

「わかりました！」

俺は大地を蹴り湖に飛び込む。

・・・って、よく考えたら息とかできないんじゃない？

湖の中は・・・何もなかった。

『いや、こっちだ。』

既に<<加速>>は解かれている。

・・・。。。。。。ああここで溺れて死ぬのか・・・楽しかったのかな俺の人生・・・。

と、物思いに耽っていると突然何かに掴まれた。

そこで意識が途切れる。

気がついたら見知らぬ土地にいた。少なくとも森ではない。

「感謝するがよい。」

突然そんな言葉を掛けられる。

「えっと・・・どちらさまですか？」

春樹が俺の聞きたいことを聞いてくれる。

「我は水の精霊だ。我が領域で人が死なれては困るのでな。こうし

て安全なとこまで転移させた。」

ほうほうほう。ところでゴウ、このことは知っていたのか？

（・・・いや、偶然だ。だがああいっただ場所にはだいたい精霊がいるからな。なんとかなるとは思っていた。）

・・・まあいいか。とりあえず助かったわけだし。

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

「本当助かりました。あのまま行けば確実に殺されてたので・・・」

「ふむ、まあよい。ところで質問だがあの怪しい連中はなんじゃったのだ？」

任せたゴウ！

（しゃあねえな。）

『わからないけど、メアリー・・・っと、その女の子のことだがそいつが攫われて助けに来たんだ。そして湖に飛び込んで抜け道を通ろうとしたのだがそれがなくて困っていたところにあなたが現れたというわけです。』

水の精霊はなにやら考えている。

「そうか、ならとりあえず王都にいつてみたらどうじゃ？」

「お、王都？」

なんだろうそれは？ いや聞いたまんまだと思うが。

「春樹さん、王都っていうのはこの世界の中心ですよ。」

メアリーが親切に説明している。春樹・・・少しは考えようよ。

『ありがとうございます。それでここからどれくらいかかるでしょうか？』

確かに疑問である。

「そうじゃな・・・徒歩ならば3週間くらいはかかるだろう。」

「「ええ！？」」

春樹と二人で思わず叫んでしまう。

「だがこれも何かの縁じゃ。特別に我が転移させてやろう。」

「「「ええ！？」」」

メアリーも叫んでいた。

「なに、気にするでない。それに我はおぬしらを気に入った。まあ頑張るんじゃない。」

そう言っ水につつまれる俺たち

「水よ、我が意思に従え。」

そう言っ水につつまれた俺たちは水ごと消える。

sideロイ

ふむ、まさか水の精霊が助けるとは・・・。

ここに精霊がいることを知る者は少ないはずですが・・・。

それにあの少年・・・中々おもしろいじゃありませんか。

私もそろそろ本職のほうに戻らせてもらおうかな。

とりあえず・・・

アクアトルネード

「水の竜巻」

周りの者を片付ける。

ふふふ。本当にあの少年はおもしろい・・・。

光の向こう。それと水の精霊（後書き）

いやあ、ルビ振る方法忘れてたけど尾も出せてよかった。
というわけでまあ・・・目指せ1日1話更新です！

王都についた。(前書き)

なんか方向性がまともりません。

王都についた。

王都についてから3日ほどたっているらしい。
現在王都の城にいる。

まあ何があったかと言うと・・・

「水の精霊に感謝だな。」

俺はそんなことを思いつつ王都の巡っている。

いやあ、すごいなあ・・・。

「お、やべ、あれうまそうじゃね？」

「わー、本当です。春樹さん食べに行きましょう！」

などと食べ物を買って漁る二人を引きつれて俺は図書館を目指す。

いやあ、俺と春樹はこの世界の知識が不足してるからね。

図書館に行けばなんかあるんじゃないのかなーって。

「これが王都の図書館・・・でっけえ。」

俺もそう思うよ春樹。

とりあえず中に入ってみる。

中もでかかった。

・・・

目当ての本は見つかった。字もなぜか読めるし・・・とりあえず読むか。

俺はテキトウな席に座り読みはじめる。

春樹も俺と一緒に本を読んでいる。

メアリーは・・・経済学についてかかっている本を読んでいるっぽ

い。

俺たちは黙々と本を読み続ける。

鐘の音がする。

この図書館の人かな？こちらへ歩いてくる。

「本日はもう閉館なので・・・また来てください。」

・・・？なんかちよつと言ってることおかしい気もするけどまあいいや。意味はわかったし。

「えっと、貸し出しとかはしてないんですか？」

「すいません。貸し出しのサービスはやっておりません。」

「わかりました。それでわ。」

・・・あ、宿とかどうしよう。

図書館を出て俺たちは宿を探している。

「あー、図書館へ行く前に探し解きやよかったな大樹。」

「だよなあ。」

「でも、きつとどこかにありますよ。」

メアリーが励ましてくれる。

そういえば結局お菓子とか・・・ああ・・・サラバ俺の全財産・・・。

（いや、それならなんとかなと思うぞ。）

え？マジか？

（まあな……。とりあえずそれはいいとして宿どうするんだ？）
などというやり取りをしつつ歩いて行く。

「ああー、てかそもそも金がないじゃん！」

……。あ。忘れてた。

「あ、それなら……。3日くらいなら止まれる分のお金はありますよ。」

おお！でも女子から金を借りるのもなあ……。

（なら稼げばいいじゃねえか。）

やっぱギルドとか？

などと会話をしていると肩に何かぶつかる。

そこにいたのは鎧を身に纏ったおっさん（？）である。

「おい坊主どこ見て歩いてんだ？」

お怒りのご様子である。

（あー、こういう類の輩はめんどいぞ。）

なんでさ？

（これ多分王城の兵士だぞ。多分下っ端だけど。）

ええ……。でもあの国の兵士は弱かったしなんとかなるんじゃない？

（よく考えろ。ここは王都だぞ？あの城にいたレベルより上の奴なんてたくさんいる。）

「おい、無視してんじゃねえよ！だいたいなあ、お前みたいのがいるからなあ……」

あー、嫌な事があってそれで偶然ぶつかった俺に八つ当たりという感じか？

んー、まあ俺は別に何もされなければいいし……。
とりあえず……

「えっと、すいませんでした。」

愛想笑いを浮かべて謝罪の言葉を口にする。

「あ？誠意を感じねえな？」

うわあ……。こんな人柄で王城の兵士とか……。俺の中のイメージ

崩れる・・・。

ちなみに春樹はメアリーと二人で少し離れた位置にいる。

それでいいんだ。さすがにメアリーを巻き込むわけには行かない。

「土下座しろよ、悪いと思ってるならそれくらいできるだろう？」

ふむ・・・。すぐくありがちなセリフだ。

（お前が持つてるラノベに似たようなこと言うキャラが出てたよな。）

そうそう、いたなあ・・・。

「できねえの？悪いと思ってるなじゃねえのか？」

まあいいか・・・。それで済むならしてやろうかな。

俺はその場で土下座をする。

「すいませんでした。許してください。」

男は俺の頭を踏む。

「あ？額を地面に擦り付けろよ？そんなんで許されると思ってんのか？」

・・・ゴウ。俺さ思うんだよ。こんなのが王城の兵士とか世も末だな。

（そうだな・・・まあもう少し踏まれてろ。おもしろいことがおきるぞ。）

ほう？そいつぁいい。どうなるか楽しみじゃねえか・・・。

結構イラついてきたがそう言うなら・・・。

「これでよろしいでしょうか？」

「あ？聞こえねえなあ！」

と、男が叫ぶ。すると・・・

「ほう貴様。何をやっている？」

そこに現れたのは銀髪の女剣士（？）である。

その女は男の腹を剣の柄で殴る。

ごはっ という奇声を上げてその場に崩れる男。

「大丈夫か少年？」

その女性も似たような鎧を着けている。

「あ、はい。大丈夫ですけど・・・」

頭が痛い・・・。まあそりゃそうか。踏まれてたわけだし。

それにあいつ本気で体重掛けてきたぞ・・・。

（おい、マジいんじゃないのか？）

だが倒れるわけにはいかん・・・。

なんでこんなありがちな展開が・・・クソッ・・・。春樹たち大丈夫・・・。

そこで俺の意識は途切れる。

side 春樹

げ、あいつ倒れやがった。珍しい・・・って思ってる場合じゃねえ！

「おい大樹！大丈夫か！」

俺は急いで駆け寄る。メアリーも後ろをついてくる。

「大丈夫ですか大樹さん！」

傍に行き意識があるか確かめる。あ、ねえわ。

「貴様らは何だ？」

銀髪の女剣士・・・いや騎士か？まあいいか。とりあえず尋ねてくる。

「こいつのダチさ。」

「私の命の恩人です。」

銀髪の女性はこちらを観察するかのように眺める。

「なら何故助けに入らなかった？」

まあ他人から見たらそうなるだろうなあ・・・。

「そ、それわ・・・」

メアリーが何やら思い悩んでいる。

・・・とりあえず。

「大樹があ程度の奴に負けるとは思わなかったからですよ。」
とだけ言っておくか。まあゴウがいるしな。

「ほう・・・仮にも王城の兵士であるこの男に貴様のツレが負けな
い、と？」

「そうだよ。」

俺と銀髪の女性は睨み合う。

・・・って、それはいいんだよ！

「おい、大樹大丈夫か・・・って意識はないんだったな。」
とりあえずこいつをおんぶする。

うん、相変わらず軽いな。

「おい、そのあんた。ここらへんに医者とかってないのか？」
女は答えない・・・。

2，3分くらいしてから返答があった。

「私についてこい。」

そう言い銀髪の女性は歩き出す。

まあ行く当てもないし・・・

「メアリー、とりあえずついていこうか。」

「はい春樹さん。」

・・・えっとここは？

「目覚めたか。」

俺はどうやらベッドの中で寝ていたようだ。

そして傍にはあの銀髪の女剣士が椅子に座っている。

「・・・えっと、ここは？」

（ここは王城だ。）

俺の疑問にゴウが答える。

銀髪の女性は答えず部屋を出て行く。

「…………俺何かしましたか？」

10分後。

春樹とメアリーが銀髪の女剣士と共に部屋に来る。

「お、大樹。目が覚めたか。」

「大樹さん目覚めたんですね！」

「……メアリーのテンションが少し高い気もする。

「ふんっ、お前はここで丸3日寝てたんだよ。」

銀髪の女剣士はつまらなさそうに言葉を吐く。

なんかめんどいなあ……。

「えっと、ところでお名前は？あ、俺は井沢大樹です。」

「エリスだ。」

エリスというのか……。

と、自己紹介も終えたところで……

「どうしよう？」

「とりあえず体調が回復するまではこの城にしよう。王様の許可もあるし。」

そういうことならゆっくりするか。

「それじゃあお世話になります。」

王城を宿感覚で泊まることになったのである。

「ちなみにここきてから3日経ってるからね。」

「……俺そんな寝てたのか。」

少し鍛えようかなあ……。

王都についた。(後書き)

誤字とか脱字とかあったら教えてください。
後感想とかももらえるとうれしいです。

春樹が余計なことをいうから・・・（前書き）

えっと。新しいものを書き始めました？

というわけで前より更新頻度が下がります。

それでも頑張れたらいいなあ

春樹が余計なことをいうから・・・

「そういえば貴様のツレ・・・春樹だっけ？がおもしろいことを言っていたな。」

「ん？何かアホなことでもいいましたか？それなら謝つときます。すいません。」

丁寧にお辞儀をする。

「失礼だなっ！」

現在王城の剣士・・・じゃなくて騎士団の訓練の風景を眺めています。

「なに、我が騎士団の騎士をお前が倒せる・・・などと言っていてだね。」

・・・うわあ。嫌な予感がする。

（諦めろ。もう展開は読んでいるだろう？）

ゴウ・・・そんなこと言うなよ！助けてくれよ！

（それじゃお前の為にならねえからな。今回はパスだ。）

「それを見せてもらおうかな、と思ってだね。」

いかん・・・全力疾走だ。

「メアリー行くぞ！」

「え？はあ・・・」

いまいち話についていけないメアリーは「ぼかーん」としている。

だがそんなことには構ってられない。俺はメアリーをお姫様だっこする。

「・・・えっ！ちょ、ちょっと何やってるんですか！？」

（ビュービューやるねー）

うるさい！俺は命が大切なんだよ！

「メアリー<<加速>>してくれ。後でなんか1個言うこと聞くからさ。」

「はぁ・・・わかりました。」

すう・・・と息を吸う。

「<<加速>>」

ぐにゃりと視界が歪む。

俺はさらに本気で走る。

ゴウが言うにはまだ完全に使いこなせるわけじゃないそうだ。

『任意に発動はできるが時間が限られている。本来なら何時までだって加速し続けられるんだ。』

だそうです。

なので結構本気で走ってる。

数分間走り続ける。

「そ、そろそろ限界です。」

ぐにゃりと視界が歪む。

後ろを振り向いてみる。

「ふう・・・どうやらないようだ。」

（そりゃ<<加速>>してんだ。追いつけるわけないだろ？）

「いったいなんだったんですか？」

「何、ちょっと殺気を感じてね。」

・・・いやぁ本当のことなんて情けなくて言えないわ。

とりあえず・・・部屋に戻るか。

ガチャ

「ただいまー」

俺の部屋に春樹が居た。

「なんで逃げてるんだよ！俺あの後・・・うう・・・さすがにひどい・・・」

「お前がわけのわからんことを言うからだ。」

「だって、ゴウがいるしなんとかなるかと思っただよ。」

「まあ・・・わからなくもないが、それじゃ俺の為にないって・・・」

と、そんな会話をしつつ俺はベッドに腰掛ける。

まあそんなこんなで二人で雑談をしている。

コンコン

突然扉をたたく音がする。

ん？なんだろう？時間的には夕食かな？

「はい開いてますよー」

ガチャ

そこにいたのは銀髪女剣士・・・じゃなくて騎士のメアリーである。

「何故逃げた？」

うわぁ・・・怖いよ。めっちゃ睨んでるよ・・・。

「いや、その・・・身の危険を感じたといいますか・・・あはは。」

「だがここに逃げ場はないぞ？」

ええ・・・ひどい・・・てか急すぎる！

「えっと・・・メアって、何やってんですか！」

俺の言葉途切れた理由は剣を喉元に突きつけられたからである。

「何をもって・・・見たまんまだ。」

ちなみに春樹は何をしているかという・・・

完璧に「我関せず」の態度である。覚えてろよ春樹・・・

「そ、それでご用件は？」

もう諦める。

「ふむ、何・・・せっかくだ、お前私と組み手をしないか？
組み手という名の虐待ですね、わかります。」

「いや・・・ちよっと実力差が・・・」

「なら一番下っ端の奴ならいいだろう？」

そ、それくらいなら勝てるかな・・・？

（わからんな。ここに騎士団はそれなりに強いと思う・・・が下っ端だしやってみろよ？）

なんと無責任な。

（あ、もちろん手助けなんてないからな？）

本当無責任だ。

だがどうして組み手だ・・・色々おかしいだろ。もう帰りたいよ！
だが・・・それで機嫌をとれるなら・・・命は大切だからね。この人断ったら絶対首刎ねるよ。

「わ、わかりました。相手になるかはわかりませんが・・・やってみます。」

答えに満足がいったのか、剣をひっこめてくれる。

「ふん・・・まあいいだろう。明日の午前10時、訓練場に来い。」
それだけ言い残しメアリーは部屋から去っていく。

「春樹のせいだぞ！絶対巻き込んでやるからな！」

俺はメアリーが出て行った後にそう叫ぶ。

「嫌だよ！」

即答である。

「いざとなったらメアリーの＜＜加速＞＞で逃げるからな！」

なんだろう・・・

なんかよく考えたら俺メアリーのことを＜＜加速＞＞が使える便利
な子とか思っ
てないか？

いかんいかん。メアリーはあくまで保護すべき存在だ。

恩人の妹さんである。うん、そうだ。守るためには強くないとな。

「まあ、お前は絶対巻き込むがな！」
春樹を指差しそう叫ぶ。

ちなみにメアリーは隣の部屋に泊まっている。
まあ男女が一緒というのはマズいだろうしね。

（あー、まあ頑張れよ。）

あー、春樹を絶対巻き込みたい。

（ふむ・・・時間はまだあるんだし考えるか？）

お、手伝ってくれるか？

（まあこんなことになったのはハルがアホなことを言ったからだしな。）

よし・・・飯食って風呂入ったら考えようぜ！

見てろよ春樹・・・

こうして夜は更けていくのであった・・・

春樹が余計なことをいうから・・・（後書き）

とりあえず今までの中で一番勢いとノリで書いた・・・気がする。
感想とかくれるとうれしいです。

俺がエリスと戦った日（前書き）

どうも。

今回は長いです。

戦闘シーンとか思うようにかけなかったわ・・・orz
少しずつ上達してきたいなあ

俺がエリスと戦った日

「始めっ！」

その言葉と同時に俺は剣を出現させる。

ゴウ・・・せめて助言くらいはくれよな？

（そのくらいならいいさ。）

絶対勝つ！

まあなんでこんなやる気かと言うと・・・

朝食を食べてるときにエリスが部屋に来てさ・・・

「お前・・・わかっていと思うが手抜きをしてワザと負けるなんてことをしたら・・・どうなるかわかっているだろうな？」

と、丁度そんなことを考えていたときに言われたからです。だがどうなるかなんてわからない。

「ほう・・・どうなるというんだ？」

「私のサンドバックになることになるが？」

「いやいや。手抜き？そんなことするわけないじゃないですかっ！

一生懸命やりますよ！」

命ってさ大切だよね。

その言葉を聞き満足したのか帰っていった。

ということが朝あってですね。
ふう・・・

ちなみにエリスは審判です。

最初の「始めっ！」はエリスが言ったのである。

というわけで結構真面目です。

だが実際勝てる気もするんだがな。

身体の基本スペックが違うしな。

その場で跳躍する。

剣を相手に向かって投げる。

「う、うわぁああ！」

カァン！

弾かれた。

「あ、そうだ。鎧つけてたんだな。」

(忘れてたのかよ！)

だが俺は審判に交渉を試みる。

「なぁ今の生身だったら絶対死んでたよな？俺の勝ちだよな？」

「馬鹿か？戦場で鎧をつけない奴がいないわけないだろ。」

どうやら交渉はできないようだ。

仕方ない。きちんと降参してもらおう。

相手が斬りかかってくる。

「それっ！」

それを剣で弾く。ついでに腹に蹴りを放つ。

だが鎧を着ているのでちよっとバランスを崩した程度である。
鎧って便利だな。

「これでどうだ！」

また斬りかかってくる。

剣で弾く。

ああ、そうか、見習い騎士だったなこいつ。

・・・見習いには悪いけどこっちは命がかかってるんだ・・・。

「悪く思うなよ!」

俺は相手の足を払う。

「え?」

その場所にこける見習い騎士。

そのまま首元に剣を突きつける。

「これでいいだろう?」

俺は振り向きエリスにそう問いかける。

すると騎士団の連中（メアリー含む）は皆啞然としていた。

春樹とメアリーはいつも通りである。

「おーいエリスー。俺の勝ちでいいだろ?」

「・・・はっ、え? 何? 聞いてなかった。」

・・・そんなに驚く光景か?

「いや、俺の勝ちでいいだろ?」

「あ、ああ。お前の勝ちだ。」

いやあ、足を払うのが俺の得意技になりそうだよ。

「ふむ・・・おもしろい。」

エリスがいきなり襲いかかってくる。

「つぶねえ・・・」

俺はギリギリのところで避ける。

「何するんだよ!」

「気が変わった。やはり戦え。」

「断る。」

いきなりなんなんだ?

（これは何を言っても無駄そうだぞ。）

えー、じゃあお前がやれよ。

（いや、いい機会だ。やってこい。）

えー嫌だよ！

（でもどのみち戦闘は避けられないぞ？）

んー、そうだが。

ちなみに今ゴウと会話をしているがエリスは俺に攻撃をしまくりである。

何故無事かというと、ゴウが俺の身体で剣を弾いているからである。いや、よく考えたらこんなことしなくてよくね？

（さて、そろそろチェンジな。）

まあ・・・やれるだけやるか。

「ほう・・・私の攻撃をここまで耐えるのか。」

「言つとくが俺はそんなに強くないからな！」

俺はエリスに向かって走り出す。

「これでどうだ！」

俺はエリスの首目掛けて剣を振る。いや、ここまでされたんだ。絶
対倒す！

「甘い！」

次の瞬間、エリスは俺の背後にいた。

だがこの程度でやられる俺じゃない！

俺は後ろに蹴りを放つ。

そのまま俺は距離をとる。

「ほう・・・やるではないか・・・。ならば全力だ！」

えー、なんか全力とか言ってるよこの人。

「ふう・・・ここまでされたんだ・・・絶対倒す。」

その為ならなんだってやるさ。例えば・・・

「春樹！これは試合じゃねえし・・・お前も参戦な。」

「おう！」

こうやって春樹を参戦させたり。

「メアリー、というわけだ。力を貸してくれ。」

春樹は隣に居るメアリーにお願いをする。

「まあ・・・いいですけど。」

ふう・・・とメアリーは息を吐く。

「<<加速>>」

春樹が聞き取れる程度で呟き能力が発動する。

俺の視界から春樹たちが消える。

眼前のエリスが倒れる。

どうしてこうなった・・・。

「<<飛翔>>」
フライ

エリスが何かを呟く。

バサッ。

いきなりのことで俺は反応ができない。

(ほう・・・能力持ちか・・・。)

ゴウは一人で納得してるしさ。説明してくれよ。

・・・って、飛んでるよ!

「っふ、そちらにも能力持ちがいたようだな。」

相手は空を飛んでいる。

「避けなくていいのか?」

背中から生えている羽を模したエネルギーの集合体から何か放たれる。

(マズい、避ける!)

ゴウが身体を勝手に使い避ける。

次の瞬間、攻撃された場所が燃え上がる。

「私の能力は空を飛ぶことだけじゃない。」

・・・えー、いきなりラスボスじゃねえか!

ショット
「羽撃」

(ふむ・・・空を飛んで、羽を撃ちだす。コイツはそうとう手強い

ぞ。)

つく、このままじゃ二人と接触できない。

「今ので気がつかないと思ったか？接触はさせない。」

(洞察力もあるな……。本当、なんでこんな流れになったんだろうな？)

さあ……。？てかこれはさすがにムリじゃね？

(ふむ……。お前が限界まで行ったら変わってやるよ。)
というわけで全力です。

と、いったけどさ？相手空飛んでるんですよ。

剣が届かず相手の攻撃だけ来るんだ。

「てめえ！セケエぞ！降りてこいや！」

春樹たちも空までは行けないようにで……

「自らの能力を使っているだけだ。文句があるのか？ショット羽撃」

俺は左に避けようとする。

「ふんっ……。おしまいだ！」

避けたはずの攻撃が俺の身体に当たった。

「まだ戦える！」

こうなりゃ剣を投げて一発で決めるしか……
やってやるさ。

「これで……。どうだっ！」

俺は剣をエリス目掛けて投げる。

だが弾かれる。

(……。まあここまでできりゃ上等か。後は任せな。)

おう。俺は少し寝る・・・。

「なんだ？もう終わりか？」

『あ？まだ終わらねえよ！』

「ふんっ・・・そうじゃなくてはなあ！」

相手がまた羽を撃ちだす。

『はぁ・・・全力を出すのか。』

俺は撃ちだされた攻撃を弾く。

手には刀がある。

『さて・・・まだ明かすわけにはいかねえからな・・・』

今の身体でできるか・・・？いやギリギリいける！

ブラックアウト
『暗転』

俺以外の五感を奪った。それは加速中の二人にも適用される。

『あまり長くは保てないんでね、決めさせてもらおう。』

俺は刀をしまい、手をエリスに向ける。

ブリザード
『吹雪』

・・・駄目だ。発動しねえ！やっぱまだ早い。

俺は刀を再び手に装備する。

『こうなりや物理攻撃か。』

俺は構える。

剣に雷を纏わせる。

『この程度ならできたか・・・雷刃撃^{らいじんげき}』

俺はエリス目掛けて跳躍する。そのまま翼を切断する。
着地と同時にエリスの首元に手刀を・・・。

ま、五感を奪われているんだ。痛みなんて感じないはずさ。

俺は気絶したエリスを見下ろす。

さて・・・急に攻撃してきた理由を探らせてもらうか。

『んー・・・駄目だ。やっぱ使えないな。これでいいか?』

俺の掌が淡い光に包まれる。そのままエリスの額へ手を持っていく。

『・・・違ったか。』

つと、そろそろ暗転の効果が切れるな・・・。

あー、この身体ってこういう点じゃ不便だよなあ・・・

などと思いつつ俺はその場に座り込むのであった。

・・・?あれ?確か・・・ああ、ゴウサンキュ。

(ん、別にいいさ。)

俺は身体を起こす。

「えっと・・・どうして皆倒れてるんだ?」

(なんか春樹たちを捕まえようとして自滅してたぞ、加速中なのに
掴まえられる訳ないのに。)

その通りである。

俺がエリスと戦った日（後書き）

とりあえずさ、書いて思ったんだよ。

何日かに分けて書くと内容が変な風になったり

後技名とかルビとか考えるセンスが俺にはないとか

そんなわけで感想とか待ってます

俺の旅にエリスが加わる日（前書き）

少し書き方を変えてみようかと思って思った。
少しづつ変わっていくと思うけどまあ気にしないでください

俺の旅にエリスが加わる日

「あー、疲れた。」

「だよなあ・・・」

「ですね」

エリスと戦ってから既に3日経過している。

さっきまで王様と話をしていた。

ま、エリスがいきなり襲い掛かってきたことの謝罪とエリスの処分についてだな

まだ処分は決まっていない

「・・・まさか魔物退治を依頼されるとわなあ・・・」

「だよなあ・・・」

「・・・」

そう、王様は俺たちの腕を見込んで魔物退治を依頼してきたのだ
報酬がそれなりによかったので受けた

（言っとくが俺は何もしないからな？）

わかってるよ

当日

何故か知らないがエリスがついてくることになった

「ふんっ、上からの命令だからな」

というわけで4人で魔物退治へと出発だ

現在森の中である

依頼内容は『最近近くの森の洞窟に巢食ってる魔物の駆逐』
ま、要するに洞窟まで行って全滅させてこいってことだろ

・・・・・・・・・・・・・・・・

皆無言である

(ま、しょうがねえだろ)

俺はゴウと会話を楽しんだ

洞窟の目の前までやってきた

「それじゃあ行くか」

「わかった。んじゃ行こうか」

俺と春樹は洞窟へ突撃しようとする

「待たんか、馬鹿共」

ひどい言われようだ

「んだよ」

「あのなあ・・・作戦のひとつも練らずに突撃するアホがいるか！」

「「いや、いますけど？」」

お互いを指差しながら俺と春樹は声を揃える

「・・・はあ」

メアリーはため息をついてる

ま、冗談はこれくらいにして・・・

「作戦ねえ・・・んなものない。いざとなったらなんとかするからさ」

「ふんっ・・・まあいいだろう」

俺は剣を出現させる

春樹はグローブを装着する

エリスは剣を手につ

メアリーは・・・

「メアリーは俺か春樹の傍に居ろよ？」

「わかりました」

(ヒューヒュー)

・・・うるせえ！

「んじゃ、行くぞ！」

・・・

グロイ

予想以上にグロイ

巨大なGとか巨大なカブト虫とか・・・それを斬りながら進んでいくわけだが・・・

エリスはなんであんな平然としてられるんだろ

メアリーなんか気絶しちゃってるよ

俺とエリスは剣だからマシだが・・・春樹は・・・いや、考えるのはよそう

洞窟は一本道だ

奥に広々とした空間があり、そこにめっちゃいた

エリスが空を飛んで殲滅してくれた

「助かった」

「気にするな」

「んじゃ、来た道を戻ろう」

なるべく死骸を見ないように歩くのはとても辛かった

洞窟を出た

「あー、キモかった」

「だな、俺なんて手に感触が・・・おえ」

春樹・・・やっぱ大丈夫じゃなかったか

（・・・どうでもいいけど囲まれてるぞ）

・・・どうでもよくねえよ！

俺は剣を手に出現させる

「ん？どうしたんだ？」

「いや、ちよつと不穏な空気を感じてね・・・・・・・・ゴウが」

後半は春樹に聞こえる程度の音量で言う

「なるほど・・・俺たちでどこまでいける？」

春樹もグローブを装着しなおす

「さあな・・・やれるだけやろうぜ」

「「でてこいやあ！」」

side副隊長

まさか上から隊長抹殺命令が出るなんて・・・

俺は部隊を引き連れて隊長が向かった洞窟までやってきた
出てきたところを叩く

待つこと数十分

隊長たちが出てきた

「お前ら・・・準備はいいな？」

騎士団の連中は皆頷く

正直こんな命令受けたくないがそうもいかない
隊長には悪いが死んでもらいます

ん？なんであの少年たちは武器を構える・・・そもそもどこから出
した？

不思議に思ったがこのチャンス逃すわけには行かなかった

・・・今だ！

「いくぞっ！！！」

side大樹

「いくぞっ！！！」

騎士が現れる

「・・・なっ！？」

まずは話し合いたいな・・・きつとムリだが

「お前たち！どうしてここにいるんだ！」

リーダーと思わしき人物が一步前へ出る

「上からの命令です。隊長には申し訳ないけど・・・ここで死んでもらいます！」

「・・・つく、やはり深く探りすぎたか・・・これを期に私を消すつもりか・・・？」

なにやら呟いている

「えっと・・・その俺たちは助けてもらえますか？」

ま、聞いただけ聞いてみよう

「・・・『君ら3人も殺せ』と上は言っていてね・・・残念だが助けることはできない」

（ま、そりゃそうだ・・・さて、準備はできたか？）

「そうですか。なら仕方ありません・・・ここで貴方たちを倒して行きましょう」

それが戦闘の合図だった

「チッ・・・やっぱ強いな」

4分の1くらい倒した・・・

やっぱ人数の差つてのは大きいな

エリスは使い物にならないし、メアリーは最初から数に入れていない俺と春樹の二人で相手をしている

「おらっ！」

回し蹴りを放つ

「ふんっ！」

春樹はなんか空手の技っぽいのは使っている
名称なんて覚えていない

「これでどうだっ！」

（とりあえずあのリーダーっぽいのを叩け）

了解

俺はリーダーっぽい目掛けて走り出す

「これでどうだっ！」

斬りかかる

カキーン

受け止められる

「ま、一撃であんたを倒せるなんて都合の良い妄想なんてしてなかったが・・・」

「その程度では俺には勝てぬよ」

（一旦退け）

だな

一旦退く

「春樹！大丈夫か？」

身体ひとつで2人を護りながら戦わせてしまった

「いや、キツイ！先にこっち片付けるぞ！」

「わかった！」

手近な兵士へ斬りかかる

せめてエリスが使いものになれば・・・

あの野郎・・・絶対仕返ししてやる

護りながらってのはキツいな

「しまっ・・・」

数名の騎士が俺の横を駆け抜けていく

むしろ今までそれがこなせていたほうが不思議だ

「春樹、任せた!」

「ちょ!お前・・・って、邪魔だあああ!」

俺は追いかける

(・・・今回は何もしない)

つく・・・わかってるさ!

「待てやああああ!」

追いついた!

俺の一撃が決まる

・・・数名って後2人か

sideエリス

現在私はメアリーと二人で洞窟の中に居る

だがそんなことはどうでもよかった・・・

そんな・・・どうして・・・

・・・

私は小さい頃に能力に目覚めた

私は小さい頃から訓練を受けてきた

友達なんていなかった

私にとってこの国を守ることが生きが이었다

なのにその国へ裏切られた・・・

ある時王の様子がおかしいことに気がついた
それを調べていた

この国での人身売買は禁じられている

だが裏では王が人を買っていた

私はそこまで辿り着いてしまった

気づかれたつもりはなかった・・・

（・・・だが気がつかれていたのか・・・）

王にしてみれば私を始末する良い機会。これを逃さないわけがない
か・・・

気がついたら私とメアリーは追い込まれていた
部下だった騎士に殺されかけている

何故か抵抗する気が沸かなかった

（きつと・・・私は絶望しているんだろう）

ここで死ぬのも良いかな・・・

side大樹

結局逃した2名は洞窟の中に入っていた

今追いかけているが・・・間に合うか？

メアリーは加速してくれれば・・・でもそんなことにまで気がまわるか・・・？

間に合え！！

願いが通じたのかはわからないけど俺の身体はいつもより早く動いている

『つたく・・・しゃあねえな。俺はあくまで走るだけだぞ？』

ゴウ・・・助かる！

『ま、俺が本気になれば一瞬だがなっ！』

本当に一瞬だった

会話をした直後俺の視界には二人が映った

「メアリー！一瞬でいいから加速だ！」

「だ、大樹さん！」

マズい・・・間に合うか・・・頼むメアリー・・・

「＜＜加速＞＞」

次の瞬間俺の隣にエリスをひっぱっている状態のメアリーが現れた

「よくできたな。後で美味しいもの食わしてやるよ」

俺はメアリーを撫でてやる

頬がちよっと赤い

やっぱ恥ずかしいかな

エリスは・・・あー、完璧にショック受けてるな
そりゃそうか・・・仕えるべきものに裏切られたんだ
だがそれどころじゃない・・・

相手が同時に斬りかかってくる

「メアリー頼んだ」

「はい。＜＜加速＞＞」

視界が歪む。一瞬の加速

だがこの二人を葬る程度ならそれで十分だ

「さて・・・俺は戻るが・・・その前にこの絶望している奴をなんと
かしねえと・・・」

俺はその場にしゃがみこむ

「おいエリス？聞いているか？」

顔を上げるエリス

「なあ・・・私はどうしたらいいんだ・・・」

いきなり何言ってるんだこいつ

「守るべき国に裏切られて・・・なあ、私はどうしたら・・・」

・・・守るべきって・・・コイツはこういう考え方か・・・

「ガハッ」

「何してるんですかっ！」

メアリーが怒るのも当然だ

俺はエリスを蹴っ飛ばしたんだからな

「甘ったれてんじゃねえよ！守るべき国だあ？仕えるべき国の間違
いじゃねえのか！」

・・・まあ正直どっちでもいい気がするけど言わなきゃ気が済まな
かった。なんでだろう？

「お前に・・・何がわかるんだ!!」

「知るか！」

即答である

「私はもう・・・死にたいんだ・・・」
なあゴウ・・・

(言うな・・・メンタル弱す・・・思っても言わないのが男ってやつだ)

メアリーは何も言わない。ただ見守るだけである

「死ぬとか簡単に言ってるじゃねえよ!」

まったく、これだから最近の若者は・・・

「じゃあ・・・私はどうしたらいいんだ!」

「知るか!自分が何をするかなんて自分で考えろ。子供じゃないんだろ?」

クソッ・・・春樹のほうにも行かないといけないのに・・・

「それがわからないから!だから私は・・・」

・・・ただの高校生に何言ってるんだろうね。だが見捨てる気にもならない

「なら・・・俺たちと旅をしよう。もう国にいられないんだろう?」
(・・・まあ戦力的には欲しいものだ・・・うん)

「俺たちの仲間になれよ。お前が別の国で住む処を見つけるまででもいいからさ」

手を差し出す

「何をするかも定まっていらないんだろう?この国以外にも国はあるんだ。そこで何か見つかるさ」

エリスは手を取る

「ん、じゃあとりあえず外の連中を倒そうか」

「・・・ああ。」

まあ元部下を倒せといわれたわけだし躊躇いがちなのはしょうがない
「頼むよ。・・・ま、話はこれが終わってからだ」

「大樹さん、<<加速>>」

「メアリーいきなりすぎるだろっ!」

「こ、これわ・・・」

「ああ、メアリーの能力」

（いや、よくあの会話で立ち直ったな！）
だな。不思議だ

俺の旅にエリスが加わる日（後書き）

これ書くのに数時間かった・・・
後半途中で放置してたわ・・・

春樹のターン

side 春樹

「あー、クソッ！！俺一人でとかムリだろ！」

そもそも 素手VS剣 の時点で俺に勝ち目なくね？

大樹がメアリーたちの方へ向かってしまったので一人で戦っている
春樹

俺一人じゃ限界ってのがある。数人奥へ行ってしまった
(大樹・・・任せた)

もう奥へ行った連中は大樹に任せることにした

「はぁ・・・案外できるもんだな・・・はぁ・・・」
あれから数名しか奥へ行っていない

「でも・・・もう限界だわ・・・」
(体力には・・・自信あったんだけどなあ・・・。さすがに数が多
すぎる)

立っているのが精一杯な状況

上半身は動くのが運が良い としか言えない

その場から動かずに相手を倒していくのは不可能だ

足に力が入らなくなる
立っていることすらできなくなった

「ここまでやるとわな・・・だがここでおしまいだ！」
騎士の一人が俺の首を刎ねようとする

(・・・あれ？)
首がまだついている
よく見ると首に当たる寸前で剣が止まっている

(・・・なんだ？)
「やあ、どうも。」

後ろに椅子に座った一人の青年が居た

「あんた・・・誰？」

「神様だよ」
即答された

(死ぬ間際に謎の幻覚か・・・後何分後にあの剣は俺の首に当たるのかな)

「あ、俺が解くまで剣は動かないよ」

「なんで心読んでんだよ！」

「神様だから」

・・・もったいないや

「それで？ボロボロの俺に何か用でも？」

自称神様は椅子から立ち上がりこっちへ近づいてくる

「いやあ、さっきまでの戦いは見させてもらったよ？一人でここま
でできる・・・しかもこういったこととは無縁に近い世界の住人が。
君の戦いぶりはおもしろかった」

こういうときゴウとか居ないと困るんだよ！

「それでね？君の能力を覚醒させてこの場で勝ちを収めてもらおうかなって」

自称神様は俺の額に手を置く

その手が光りだす

「まぶしっ・・・」

「目瞑ってて」

目を瞑る。数秒後、自称神様は手を額から離す

「これで君の能力は覚醒した。能力は<<操作>>。努力次第で色々な物をコントロールできるようになるよ。ま、元々半分覚醒してたっぼいし・・・」

え・・・なにそれ超便利そう

「いや、便利だよ？ま、色々コントロールするには努力が必要だけどね」

自称神様はこちらへ手を向ける

「身体の傷も癒しておくよ」

向けられた手が淡く輝く

身体の傷が消えていく。体力も回復した

「ここは森の中だし・・・今の段階でなら木は操作できと思うし・・・頑張ってね？」

そう言い残し自称神様は消えていった

同時に俺の首に剣があた・・・らない。あれ？

上から声が降ってくる

「よう春樹。待たせたな・・・？あれ？ボロボロだと思ってたけどそうでもないな」

空にはメアリーを抱えて飛んでいるエリスの姿もあった

5分後 戦闘終了

まあ皆加速して、空から撃ったり、剣で斬ったり、俺が能力使ったりしてりゃ・・・こんなもんか

まあ能力使うつていっても木の枝伸ばして相手の体勢崩したりしたただけがなっ！！

「てかお前のそれ便利だな春樹」

「ほう・・・そんな能力があるのか・・・」

大樹とエリスは俺の能力に驚いている

とりあえずどうしてこうなったのかを説明した

「自称神様とか・・・お前夢でも見てたんじゃねえの？」

「春樹・・・いい医者を紹介しようか？」

「春樹さん！そんな幻覚見るほど病んでたなんて・・・」

大樹、エリス、メアリーの3人は言いたい放題である

くそっ・・・やっぱ信じないか・・・

春樹のターン（後書き）

わーい 能力覚醒だよ

正直春樹もチートすぎる・・・

主人公はこれを超える能力にする・・・予定だったけど無理じゃね？

食料回収（前書き）

完璧ネタです

食料回収

「そういえば、ちょっと前に森の中に食料をおきっぱにしてきたやつを回収できるとか言ってたよな？」

（ああ、言ってたぜ？ふむ・・・そうだな、そろそろ回収しに行くか）

ということを春樹たちに話回収しに行く。

「にしてもすっかり忘れてたなあ」

「俺はカップめんが恋しいんだ」

（俺はポテチが食いたいわ・・・）

三者三様の想いを抱き俺たちはあの森へ再び向かう

・・・うん、二名忘れてるとか言わない

なんかいつもは「楽しみですね！」とか「ふんっ・・・まあ一緒に旅をするわけだからな」

とか反応あるはずなんだよ！

なのに今回に限っては・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

って感じなんだよ！

まあ、そんなわけで二人には寄った村で待ってもらい、俺たちは二人で旅をする

というのが1週間くらい前の話である

「まあ、メアリーにお菓子を食べさせてやりたいし・・・後どれくらいでいけるよ？」

（んー、後30分くらいかな・・・）

「後30分だってさ」

春樹はその場に座り込む

「んじゃあ、俺も少し休憩」

今回は時間をあまりかけるわけにはいかないので春樹の能力とゴウの能力で時間を大幅カットしている

春樹が俺たちの身体の筋力を操作して、筋力を限界まであげる
だがまだ春樹にそこまでの技巧はない
そこでゴウの出番だ

ゴウが足りない技巧の部分を補っているんだ
理屈は知らないが、なんでもいいからカップめんが食いたい

「よし、行くぞ・・・」

瞑想をして精神を統一する
結構な集中力があるらしい

『ん、これでいいぞ』

自分の身体が数段パワーアップしたことを感じる
エネルギーが漲ってるというか・・・

「よし、行くか」

俺たちは駆け出す

場所はゴウが覚えているので案内してもらってる
身体のスベックがだいぶあがっているので、普通の人がいけないよ
うな道も通れる

崖を飛び越えたり、水の上を走ったり・・・やべえ。ここまで鍛え
たいわ

そうしてやっとたどり着いた

「ああ・・・長かったな・・・とりあえずお湯の準備しなきゃ」

（食後にポテチだぞ？）

「俺も久しぶりに食いたくなってきたなカップめん」

3人は荷物を背負い場所を移動する

「とりあえずお湯を準備しなきゃだな」

「俺の能力の出番だな」

『そうだな、とりあえず熱を集めて石に宿せばいいぞ？ まあ実際で
きるかは知らないが・・・その能力は本来あり得ないことを起こす
ための能力なんだよ』

「ん？ どういうことだ？」

俺たちは座りながらゴウの話を聞く

『覆水盆にかえらず ってことわざがあるだろ？ 実際こぼした水は
盆の中には戻らないよな？』

「そうだな、こぼすと染み込むからなあ・・・」

お湯が沸くまで暇なので二人でポ○キーを食べている

『だが、その能力でこぼれた水を盆に戻すように能力を使えば戻る
んだよ・・・きつと』

えっと・・・？

『まあ、要するに「エネルギー」という概念に干渉して操る能力つ
てことだ・・・きつと』

春樹ポッ○ーを食べながら能力を発動させる

「ようは不可能はないってことだろ？」

『多分な』

というわけで、熱エネルギーを集めて、それを・・・なんか石に移
して、お湯を沸かそうとね

数時間後

試行錯誤の結果、とうとうお湯が沸いたぜ!!

というわけで俺はしょうゆラーメンと塩ラーメンと味噌ラーメンを
3つ食べる

春樹は味噌ラーメン2つに塩ラーメン1つ

「いっただきまーす!」

既に日は暮れている

夕食の時間である

久しぶりに食ったカップめんは美味しかった

食料回収（後書き）

久しぶりに書いてふと思った

どういうノリか思い出せない

・・・ま、まあいいか

感想待ってます

新たな世界（前書き）

異世界移動できるという設定をここで発動っつ！

新たな世界

それは突然の出来事だった

無事荷物を回収し、女二人組と合流した直後の出来事だった

「ここ・・・は？」

そこは・・・なんか江戸時代っぽいところだった

『あー、ここも異世界な』

「そういえば俺たち異世界行き来できるんだったな・・・」

最近ゴウとの会話ばかりで3人を放置している気もするが気にしない

「おお・・・二人とも無事か？荷物は・・・ん、皆いるぞー」

「いきなりでビックリしましたけど・・・ここは？」

「・・・どこだ？」

どうするべきか・・・2人に事情を説明すべきか・・・

『いや、信じてくれるとは限らないから、テキトーにごまかしておけ』

だよなあ

「さあ？でも人もいるし少なくとも俺たちが住めないこともなさそうだし・・・いいんじゃないね？」

春樹に「余計なことは言うな」とアイコンタクトを送る

ところでゴウさ・・・

『・・・・・・・・』

何やら考え込んでいる様子

そういえばどうしてこの二人は異世界に移動できたんだろうな
・・・ま、ゴウが反応したらこちらから話してみよう

「とりあえず、散策に行こうぜ」

春樹のそんな一言により俺たちは村を出て、山の中を歩く
魔物がたくさんいるなんて知らなかった

だが春樹の能力のいい修行にもなると思い、俺は魔物を春樹のほう
に回していく

エリスも剣だけで戦っている

メアリーは、俺の傍に居る

ふと視線をエリスのほうへ向けるとこちらを睨んでくる

「あー、これで能力持っていないのは俺だけかぁ・・・欲しいなぁ」
などと呟きながら魔物を刻んでいく

ちなみに春樹は現在物の硬度を操作する修行をしている

一度試していたが失敗はしていなかったが・・・『硬さ』を操作で
きないらしく・・・

まあ、あんまり硬すぎるのも考えものだしな

それに春樹の場合は周りを操って罠を張るよりも己の肉体を強化し
て拳ひとつで戦うほうが似合ってるからな

今は木の枝を操っているな。

なんでも枝を伸ばして、硬くして使いたいらしい
まあ、周りの環境を利用するというのもいいが・・・

にしても・・・強すぎる

だって、少し伸ばすはさすが100mくらい伸ばして、先にいる魔物
まで殺してて・・・

魔物も出てこなくなり、次の村に到着
俺たちは宿を取る

メアリーとエリスは別部屋である。当たり前だけどね
「さて、そろそろゴウも考え事は終わってるかな？」
「どうだろうな」

・・・

『ん？なんだ？』
いるのか・・・ちょっと話がいろいろあるからね
出てきてよ

『んー、で？どうした？』
俺の身体をゴウが動かしている

「なあ、ゴウ。俺の能力のことなんだがさ・・・」

『ああ、丁度いいな。俺もそのことを考えていたんだ』

「え？じゃあやっぱ・・・」

布団を敷き、転がりながらゴウは話を続ける

春樹は座布団に座ってお茶を飲んでいる

『扱いきれてないのは、能力がデカすぎて、お前という器に収まってないんだよ』

「なんとなくそうかなあって思ってたけど・・・」

『お前という器はお前が成長していけば大きくなる。だがそれまで器が持つか怪しい』

そりゃそうだ

『だから、お前の能力の一部を一時的に封印する』

「そっか・・・ま、それで扱いやすくなるなら・・・」

『ただし操作できるものが極端に減るぞ。今までは「なんでも」だったから大きかっただけで操作できるものを限定すれば今のお前でもある程度は扱える。さて、お前は何を操作したいんだ？』

・・・そんなの質問する必要もないと思うがな。答えは既に決まっているはずだからね

「俺は、硬度の操作を覚えたい。他は後回し・・・いや、使えなかったていい。俺はこの身体だけで全ての敵を打ち倒す」

珍しくまでもカッコいいことを言う春樹

『そうか。んじゃ、封印するか・・・準備はすぐ終わる』

どこから取り出したかは知らないチョークを手を持ち空に魔方陣を描いていく

あれ？いつも地面に書いてなかったっけ？

「あれ？地面じゃないの？」

『・・・お前らはアホか？ここは宿だぞ？他の人だって使うだろ？
そういうこと考えろよ』

二人して黙り込む

ゴウの主張が正しすぎる・・・

数分後 魔方陣を書き終え、さあ封印するぞってところで乱入者が

コンコン

「大樹さん、います？」

「大樹、いるか？」

だが俺は声を発することなんてできない

ゴウと春樹は既に封印の儀式(?)に取り掛かってる

・・・後に「封印の儀式」とかダサイ名前でこのことを言ってたことをゴウにバレ、怒られたのは誰にもいえない。

バタツ

二人が戸を開けてしまった

そこに移っていたのは宙に幾重にも展開された魔方陣を自在に操る俺(の姿をしたゴウ)と封印の過程で刻む必要があり、そのため上半身に何も着ていない春樹

「春樹さん！何してるんですか！大樹さんから離れてください！」

「春樹・・・何をしている！！」

メアリーが加速を自分とエリスに使う

俺が最後に視認したとき既に剣を持っていたエリス・・・

だが攻撃は通じること無かった

まるでそれがどうしたと言わんばかりゴウ

作業を数秒止め、空中に掌をかざす

『ちと、痛いけど・・・すぐ治すから、少しそこでくたばってくれや』

バツ・・・やめろって！

プチプロミネンス

『灼熱・弱』

空中に炎が出現する

小さな針を模り、それを発射する

あたったことも確認せず、作業に戻る

途中で炎が消える

と、思ったらどうやら命中していたようだ。二人がその場に倒れこむ

・・・十分後

『これで・・・完成だっ』

魔方陣が消える

『・・・ん？なんでこの二人が倒れてるんだ？』

お前がやったんだろ！

『・・・ああ、集中してるときは他のことが見えなくなるかな・・・
治癒ヒール』

それから1時間ほどして意識を回復する二人

「大樹さん、大丈夫でしたか？」

「春樹・・・貴様の命ここで「いや、そこまでやらなくていいから」・・・じゃあやめよう」

てか色々着眼点がおかしいと思うんだ

普通魔方阵のほうにだね．．．

ま、
いい
か
・
・
・

『・・・いや、魔法のあたりの記憶を消してだね、別の記憶をいれ
 といたんだ』

ふうん……どんな記憶をいれたんだ？

「……春樹がお前を襲って……なんでもない」

いや、なんでもなくねえよ！このやろぅううううううううううううううう

「ん、確かに思った通りとまでは言わないが前よりは使えるな」

などと呟いている春樹をよそに俺は心の中でゴウと言いつづけていた

・・・あー、俺も早く能力とか欲しいな。そういえば結局どうして二人が移動したかの理由を聞きそびれたな・・・まあいいか

修行

「おう、だいぶ扱いやすくなってきたぞ」

春樹は能力の一部・・・いやもうほとんど封印してるか・・・

とりあえず封印してからとても成長している

成長に伴い少しずつ能力も元に戻っていくらしい

俺はというと・・・

「大樹、それじゃ何も倒せない！」

エリスに剣の稽古をつけてもらっている

メアリーは加速状態を維持できる時間を延ばすことを目標として色々やっているようだ

「んじゃあ、2対2の組み手でもやるか」

5時間くらいしてから俺は皆にそういう

「んじゃあチームは・・・どうする？」

「とりあえず俺・メアリーとお前・エリスでいいんじゃない？」

別の世界だってことを忘れているんだろうな皆

「それじゃあ行くぞ！」

「おうよっ！」

「ふんっ、来い！」

「えっと・・・その、頑張ってください？」

俺は剣を手に持ち、春樹は拳の硬度を硬くし、エリスは・・・最初から剣を持っていた

メアリーはこの中で唯一武器がないけど、なんか強いのである
メアリー曰く

「お姉ちゃんが変な男の人が近寄ってきたらこうしなさい　って言うて教えてくれた」
だそうです

俺は春樹目掛けて駆け出す

だがそれをエリスに邪魔され、春樹はメアリーのほうに向かう

「加速」

正直これはチートな気もする

『まあ、春樹がもっと能力使えば加速という能力ごと操作することも可能だが・・・まだムリか』

・・・やべえ、春樹の能力マジでチートじゃねえか

「ふう・・・疲れたな」

「そうだな」

俺たちは宿へと戻っていく

次の日、この世界じゃでかいお祭りがあるらしく俺らはそれを見に行く

なんでも今の世界があるのは昔に一人の青年が革命を起こしたからとかで・・・

革命を起こした男は

「この世界の王はまだ腐ってはいなかった、腐っていたのは政治を行う者たちだ」

とかなんとか言っていたらしい

王様が幽閉されていて、それを名も知らぬ青年が助けたとかで

『・・・・・・・・・・』

ゴウはそんな話を聞きながら何かを懐かしんでいるようにも思える

祭りも終わり宿へ戻る途中

「ねえ、貴方たちってよくあそこで暴れてるよね？」

いきなり女性に話しかけられる

「まあ、暴れてるといえば暴れているのか？」

「よかったら私も混ぜてくれないかなあー。こう見えて弓には自信があるんだ」

「だめですっ！」

「ダメに決まっているだろう！」

女性陣は何故か猛反対である

だが俺と春樹は賛成である

弓という武器と戦えると・・・うん、ありだ

「まあまあ、そういうなよ」

「そうだよ、俺としては大歓迎だ」

春樹と俺はそれぞれ意見を言う

「・・・大樹さんがいいなら別にいいですけど・・・」

「ふんっ、もう知らん！」

「えーと、私は参加して・・・」

「ああ、いいぜ。俺は大樹だ」

「私はアリスだ」

それぞれ自己紹介を終え今日は分かれた

明日迎えに来てくれるとかで

楽しみである

修行（後書き）

ちよつと名前を考えないとね・・・キャラの！

修行2（前書き）

今回はセリフあんまりません

修行2

朝

アリスが迎えに来た

あれだ、俺たちは近接戦闘ばかりだから弓というのは案外相性が悪い

さらに彼女は矢に魔力を乗せ多種多様な攻撃を仕掛けてくる
厄介だ

矢が途中で分裂したり、当たった場所で発火したり、放った瞬間目の前に矢があったる（実際これはやばい、マジ怖い。加速しなかったら当たってた）などね・・・

「まあ、これでも弱いほうだけどね。私の本気は雷なのよ」

とか言ってた。今の俺じゃきつと勝てないんだろうな

春樹の能力はやはり便利だ

最近は何かひとつのものを極めようと頑張っているが・・・
俺も頑張ろう

メアリーは加速を自由に扱えるように頑張っている
始めてあった頃に比べるとだいぶ進歩しているがそれでもまだ危ない

加速できる時間を長く、いつでもON・OFFできるように
色々頑張っている

エリスはアリスと模擬戦を行っている

俺が狙い打ちにされて、それが終わったと思ったらエリスが勝負を
申し込んだのである

アリスは了承して現在戦闘の真っ最中

にしても、空を飛べるっていうのはうらやましい

矢をすべて剣で受け流し、火に変化したり、分裂したりする矢を全
て羽撃で撃ち落したり・・・

見ていてとても参考に・・・はならないな。俺には飛翔の能力がな
いから

（まあ、ここにいるやつらは皆スペックたけえからな。気にするこ
たあねーよ）

まあ、そうだけどさ

（にしても、あの弓使い・・・雷がどうか言ってたな・・・）
ん？気になるの？

（いやあ、たいしたことじゃねえけど・・・ま、いいか）
そうだね。

っと、日が暮れ始めてきた

「おーい、今日はもう終わりにするぞー」

「だな、そろそろ日が暮れてきてるし」

「ですね、そろそろ戻りましょう」

「だな。勝負はお預けだ」

「あら？ あれは私の勝ちじゃないかな？」

「いや、負けてなどいない！」

春樹、メアリー、エリス、アリスは俺の元へ集まる

「明日もくるか？」

アリスに尋ねる

「んー、そうね、まだ決着もついてないし明日も来るわ」

「わかったよ、じゃあ今日と同じ時間に来てくれ」

「わかったー」

（はぁ・・・ねみい。つと、大樹は寝たか？・・・ん、寝てるな）

身体を借りて外を歩く

さっき視線を感じたんだが・・・気のせいかな

そういうことにして早く寝るか・・・

とある集落にて

あれから、1ヶ月ほど経っている

ここは結構居心地がいいからね

まあ、その間にこの世界を転々としているわけだが

なぜかアリスも一緒に居る

まあ、ゴウも「この世界はどんなものを使うか気になるし、いいじゃねーか、それにこの世界の情報も得られる」と言っている

・・・まあ、正論だけどさ

というわけで色々なところを転々としているのである

ちなみに現在は小さな集落に居る

ここについてから既に3日も経過している

まあ、毎日が平和なのが一番いいんだけど、どうやらここにはよく山賊が来るらしい

そしたらウチの女性陣が「わかりました、退治しましょう」と勝手に

に話を進めていき・・・

現在集落の出入り口を見張っている

考え事をしていると脳内でゴウの怒声が響く

（馬鹿野郎！！ 何ボケーとしてんだっ！前見ろよ！！）

言われたとおりに前を見る

すると馬に乗った謎の軍団・・・ああ、山賊か・・・がこちらに向かってくる

「うっし、この世界での修行の成果・・・見せてやるぜ！」

・・・クソッ、俺も早く能力欲しいッッ！

というわけで、俺は俺で最近練習中の手から緋色の雷撃を出すというなんかカッコいい攻撃の準備をしているのであった

とある集落にて（後書き）

かなりテキトーなのは自覚していますが・・・こう・・・なんか・・・
・時間稼ぎ的な？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838u/>

俺が異世界で旅をする

2011年11月14日21時58分発行